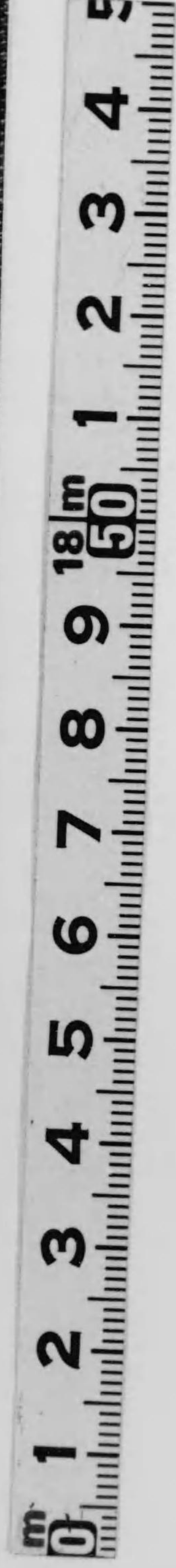


364

52



始





262-93

364-52



平田秃木譯





## 序

キツプディングの「彼等」は、かね／＼自分の愛誦してゐたものですが、その最も深く自分の心を惹いたのは、かの南英サセックス海岸の初夏、初秋の美しい描寫でもなく、幽林のうちに立つ古雅な、あの「麗はしの館」<sup>やかた</sup>でもなく、またその窓や廻廊に影のやうに出没する、可愛らしい子供でもなく、けにかの盲女が靜にも亦更に慘なる境にあるのです。「私達には一と皮しきやないのでしやう。外面<sup>おもて</sup>のことに、すぐもう傷けられるのです」といふ、敏感なその胸に向つて、美しい辭令と作法のうちに、容赦會釋なく毒害のにがき藥と、暗殺の鋭き刃を潜むる文明人の殘虐無情といふことが（譯文二七頁）、いぢらしくも自分の胸を刺すのです。全篇に漲る哀切の氣分は、一



に皆深いこの泉から湧いてゐるのではあるまいか。拙ない譯註を添へて、自分がこれを世にすゝめやうとの心を起したのも、また一途にこの思ひに驅られてのことでした。

「彼等」の譯は久しい前から企てられたのを、種々のさえから幾度か中絶されたのでした。今この美しい装幀をもて新たに世に出すを得るは、一に我が諸友の厚き同情に依るのです。添へて記して感謝の意を表する次第です。

大正五月九月

譯者

## 『彼等』

一望は更に一望に、一丘は更にその同輩にと我を招ぎ、やがて郡領の半をも過つたのであつた。此方は唯挺を前へ弾くだけのこと、別に何の面倒もなくこれに應じられるので、私は自分の車輪の下に流れるやうに郡領の走りゆくに任せた。蘭花の點々せる『東』の平地は、忽ち『丘』の百里香、冬青、灰色の草と代り、これ等ほまたも低地の海べりの豊かに實れる麥島や無花果の樹々と代つて、左手に打ち寄する潮の浪を控へつゝ、十五哩の平地を走り、やがて圓き岡や森の雜然と群がれる間を縫ふて、内地の方にと路を轉じた時、私はもうすつかり自分の相識の目標以外に出で仕舞つたのである。合衆國の首府の名づけ親になつてゐるといふ、てつきりその村に違ひない一孤村を越え、ると、忽ち隠れた村々のなかに出た



が古色蒼たるノルマン式のお寺の上に蔽ひ重つてゐる、八十尺もある菩提樹のなかに蜂の唸つてゐるばかりで、他は悉く眠つてゐるやうであつた。不可思議な小河の流は、またと彼等を悩ますことはなさ、うな、重い車の通るやう造りなされたとも思はれる、頑丈な石橋の下にその姿を没してゐる、寺よりも大きい初穂の倉があるかと思ふと、古い鍛冶屋の工場は、その管ではテムプルの武士の館であつたを告げ顔に、勇ましい音を立ててゐた。ゴオスや齒朶やヒイスの草が一緒になつて羅馬街道の一哩を飽くまで絶えじと續き生ふる共同原で、私はジブシにも逢つた。それから少し行つたところでは、犬か何かのやうに寝ころんで、日なたほつこをしてゐる赤い狐をも驚かしたのであつた。

やがて森ある岡の自分の周囲に迫つて來たので、私は車中に立ちあがつて鉢巻のあるその頂きの五十哩先の平地の田舎からも見えやうといふ、あの大きな岡のた、すまる如何にと眼をやつて見た。土地の配置

から判じて、私は自然その麓にと西の方へ續いてゐる道のとこへ出られやうと思つたが、うかと自分の森影の面布にさ、えられてゐることを考へなかつたのである。急に路を轉じると、私は先づ流れるやうな日光のこぼれんばかりに溢れてゐる、青々とした切り通しへ、次ぎに去歳の枯れ葉の私の車のタイヤアのあたりで、がさごそとおしあひへしあひ囁いてゐる、晝尙暗い隧道へと没して仕舞つた。頭の上に重なりあつてゐる、太い榛の枝は少くとも二三代は下されないものであらう、苔蒸せる檜や榎も、一向に斧の齒を入れられないので、芽を吹くことが出來ずにゐる。こ、から路は急に敷物でも布いたやうな馬場路と變つて、その褐色の天鷲絨の上には、咲きからしの櫻草の株が未枯れの女のやうな顔をしてゐる、情けない、白い莖をしてゐる、二三本のブルウベルと一緒に頭をつきあはしてゐた。坂路の利を得てゐるので、私は成りたけ速力を弱めて、風のやうに落葉の上を滑走つていつたが、今にも番人が出て來て咎められやうと覺



悟してゐるたが、唯一羽の檉鳥かしどりが遠い彼方あなたで、木下閣こしたやみのこの寂莫さびしに對して異議を申立て、ゐるのが聽えたぎりであつた。

路は尙も下り坂になつてゐる。沼地ぬまぢの中なかへでも乗り入れないうちと、少し速力をゆるめて、車を後あとへ戻さうとしかけた途端に、先頭さきの繁しげみのなかからふと日光ひが射さして來たして、私は齒止はどめを放した。

またも急に下りくだになつた。日光ひが自分の面おもてを掠めると、私の車の前輪は滑らかな靜かな芝生の草の上へと乗り上げたが、その芝生のなか、ら、鎗をかまへてゐる、十丈もあらうといふ丈せいのたか高い騎士やら、おぼけのやうな孔雀やら、細身ほそみで、圓々まるした頭つむぎの女官やらが——青々あおくとして黒味を帶び、日に輝いて——によきつと出てゐるたが、何れも皆水松いぢみの樹きを薙り込んで出來てゐるのであつた。芝生の先きに——並びの好い森が三方からそれを取圍んでゐて——苔のついた、雨風あめかぜに古ふるりた石造の古風な家が立つてゐるたが、窓は豎子たてこになつてゐて、屋根は薔薇色ばらいろが、つた赤瓦あかがはらで葺いてあ

る。家は半圓形の煉瓦塀——これも薔薇色ばらいろが、つた——に護られてゐるが、この塀がまた芝生の残りの一方をしきつてゐて、その裾のところから黄楊わづらの生垣いけがきが等身の高さに生びてゐる。細つそりした、煉瓦の烟突のほとりなる屋根の上には鳩がゐるたが、圍ひの塀うしろの後には、八角形はつかくがたの鳩小屋がちらと自分の眼めについた。

こゝではたと私はとまつた。一人の騎士の綠葉みどりの鎗は私の胸へと推し當てられ——鳩小屋といふ何とも美しいその寶玉の斯うした配置で愈ひき立ち、得もいはれず麗はしきに覺えずさえられたのであつた。

『このまゝ、狼藉として逐ひ立てられるか、乃至この武士さむらいが自分めがけて騎馬きばで駈かけ寄よつてでも來ないなら』私は獨り思つた。『こりやひよつとシエキスピーヤと女王エリザベスが細目ほそめに開いたあの庭の扉とから出て來て、お茶一つと招じやうも知れんわい。』

一人の子供が二階の窓へ現はれたして、その可愛らしいのが何やら人



なつこく手を振つてゐるやうに思へた。が、それは一人のお仲間を招んでゐたのであつた。間もなく最一つの綺麗な頭が窓へ見えたのでそれと知れた。すると、水松の孔雀のなかに笑ひ聲がしたので、何事かと振り返つて見ると、それまでといふもの、自分は凝つと家の方に見とれてゐたので、生垣の後に噴水の銀の水が日に向つてくつきりと白く吹き上げてゐるのが眼についた。屋上の鳩はく、と湧くその水に對してく、と鳴いてゐるのであつた。が、斯うした二つの調のあはひに、何かちよつとした悪戯に屈托してゐる一人の子供の、如何にも嬉しさうなせ、ら笑ひが私の耳についた。

庭の扉は——厚い土塀のなかへどつしりとはまり込んでゐる重もそうな樞板であるが——それがずつと開いたと思ふと、大きな庭帽子をつけた一人の女が、そろ／＼と古びに窪んでゐる石段へとその足をつけ、同じはか／＼しからぬ足取りで芝生を通つて歩いて來るのであつた。此

方が言譯の言葉を案じてゐるうち、女はつとその頭をあけたが、兩眼ひたと盲ひてゐるのに私は氣づいた。

『私聞きつけましたの』、彼女が云つた。『自動車でございませう。』

『何うも路を間違へましたやうで。坂上のところから曲ればよかつたのですが——實に思ひも寄らんことで——』私は云ひかけた。

『でも、結構ですわ。まあ、自動車が庭中へ這入つて來るなんて！ほんとは大變な御馳走になりましたやう——』。彼女はつと振りむいて、何やらあたりを見まわすやうな様子であつた。『あの——あの誰にもお逢ひにならなくつて？あの——多分。』

『道でも訊かうといふ方には一人も逢はんのですが、向ふの方で子供衆が頻りに興がつておるでのやうでした。』

『何れがでございます。』

『たつた今窓のところでお二人見かけましたが、庭でも一人坊つちやんの



聲が聽えたやうに思ひます。』  
 『まあ、貴方お任せな!』彼女が叫んだして、その面はさつと冴えかへつたのであつた。『そりや私とて、彼等の申すことはよく聽えますが、唯それぎりなのです。貴方は彼等を御覽にもなり、また聲をお聴きにもなつたので?』

『左様です』私は答へた。『子供衆のことはよくも分りませんが、一人はあの向ふの噴水のところで大層面白く遊んでゐらつしやるやうでした。逃げ出したのでもありませんしやうかな。』

『貴方、子供がお好きでゐらつしやる?』

滿更嫌ひでもないといふ一二の理由をば、自分は彼女に示した。

『さうですとも、さうですとも』彼女は云つた。『それならお察し下さいますでしやうが、それなら滿更下らない事とも思召さないでせうが、あの何うぞお願ひですから、この自動車で庭中を廻つて見て下さいませんか』

しやうが、一二回——極徐かに。可哀想に、皆何も見たことがないので。

誰も皆成りたけ面白く暮らさしてやりたいと思ひますのですが、でも——『彼女が森の方へとその双手を投げた。』私達、もうまるで世間を離れてゐるのですから。』

『そりや至極好い思ひつきで』私は云つた。『でも、折角のこの芝を切つてしまつては。』

彼女は右へと向いた。『ちよつとお待ちを』彼女は云つた。『こゝは南の門でございませしやう、左様でございませね? この孔雀の後に敷石の路がございませすが、私達それを孔雀路と申してをります。何でも此方からは見えないといふことですが、森の縁をお通りになつて、始めの孔雀のところでお曲りになると敷石のこゝへ出られるのです。』

がちやくいふ器械の音で、夢にでも入つてゐるやうな、あの家表を驚かすのは、宛ら靈地を汚すやうにも思へた。が、私を車を揺すつて芝生の



方を出抜け、森の縁を走つて、廣い石だ、みの路へ曲つていくと、そこには一つの噴水盤が星光入りの青玉の玉のやうに据つてゐた。

『御一緒に願へませうか』、彼女は叫んだ。『否、獨りで宜しうございます。私の乗つてゐるのを見たら、一入喜びましやうから。』

車の前の方へと軽々とその探り足を運んで、段へ一足かけざまに彼女は呼んだ。『お前達、まあ、お前達！ ようく御覽なさいよ、面白いことが始まるのですから！』

優しいその聲音の下に潜んでゐる、いぢらしい瞳れは、奈落に迷つてゐる人の魂も呼び出されやうと思ふ位、水松の影から返答の聴えたのも左こそと思つた。噴水の傍にゐた子供に違ひないが、此方の近寄るのを見て忽ち彼は逃げ出した、水盤のなかへ小さな玩具の船をおいて。紺の外衣が動かない、あの騎士の影にかくれていくのがちら／＼と見えた。

至極手際に孔雀路の緩驅を終へ、先方の望みでまた一とかへりした。

今度はあの子供も漸くその恐慌から回復したが、まだ遠く離れて半信半疑で立つてゐる。

『小僧さんが見てゐますな』、私は云つた。『如何でしやう、ひとつ乗つて見たくはないでしやうか。』

『皆まだ羞恥んでゐるのです。大變に恥かしかつて。でも、まあ、貴方ほんとにお仕合せだこと、彼等をちやんと御覽になれるのですから！ ちよつと聽かして頂戴。』

私はすぐさま車を止めた、して、濕り氣を含んだ庭内の静かさは、黄楊の香ひに重苦るしく、深くも二人を包んだのであつた。園丁が植木に鉢みを入れてゐる音、眠むたけな蜂の鳴き聲、鳩でもあらうと思はれる絶えだえの聲が私の耳に入つた。

『まあ心なしな！』、彼女は物憂げに云つた。

『唯自動車が怖いので、別に何といふこともないのでしやう。窓のそこ



の娘さんなどは、もう大變に面白さうにしてゐますから。』

『左様？』彼女はその頭をあけた。『そんなことを申して、私が悪うございました。皆ほんとに私が好きなのですから。せめてそれがあるので、斯うして生き甲斐もあるといふものです——皆で好いてくれすまので。左様ですわね、ほんとに。彼等がをりませんでしたら、この邸はまあ何んなでしやう、考へてもぞつと致します。それは左様と、こちらはこれで綺麗でございませうか。』

『これまでに斯んな結構なお邸を拜見したことはありません。』

『左様皆様仰つしやいますが。そりや勿論私にもそれとなく分りは致しますが、でも、それはまた別の事ですから。』

『では、貴女はこれまでついぞ——？』私は云ひかけたが、急に云ひ悪くなつて黙つて仕舞つた。

『物の覚えがついてからといふものはつひぞもう。何でも生れて僅か

二三月月してからのことだと申します。でも、私何か覚えがあるに違ひないので、でなければ、色を夢に見るといふことはない筈ですから。私、夢に光を見ますの、それに色もです。でありながら、何うしても彼等を見ることはないのです。起きてゐる時と同じに、彼等の聲は聴きましますのですが。』

『夢に人の顔を見るといふことは難しいことです。人に依るとそれも出来ませんが、大抵の者は左様いふ技能はないのです。』私は續けた、もう隠れんばかりにして子供の立つてゐる窓の方を見上げて。』

『私も左様伺つてをります。』彼女は云つた。『それに、夢で死んだ人の顔は決して見ないものだと思ひますが、本當に左様でございませうか。』

『何うも左様だらうと思ひます——漸く思ひ當りますのです。』

『でも貴方は何うでございませうか——貴方御自身は？』盲ひたるその眼は私の方へと向つた。



『死んだもの、顔を夢に見たことはとんとありませんな。』  
『ぢや、盲目も同じでございますわね。』

日は早や森影に沈んで、長い影は次ぎ／＼に傲岸なあ騎士達を占有していつた。光はあの澤々した葉の鎗頭から消えていき、勇ましい硬いその緑葉の一つ残らず薄墨に變つていくのを私は見た。家は、かつて十萬の日の逝くに黙從したやうに、また一日の日の終れるに黙從して、愈深く影のうちなるその休息に落ちつきゆくやうであつた。

『見たいと思召したこともございまして？』暫らく黙したあと彼女は云つた。

『大變に見たいと思つたこともあるのです』私は答へた。影がその上にと迫つたので、子供はもう窓のそこにはゐなかつた。

『あ、！私も左様ですわ、でも、そりやかなはぬことなのでしやう……何方にお住ひでゐらつしやいますの？』

『郡領もずつと向ふの方でして——六十哩の以上もありましやう、そろ／＼もうお暇をしなければなりません。大きな車燈を持つて來ませんでしたから。』

『でも、まだ暗くはありません。私、ちやんと分りますの。』

『家へつく頃には暗くなりましやうから。何は兎も大丈夫といふところへ出るまで、誰か案内の人を貸して頂けましやうか。まるで西も東も分らないのですから。』

『追分までマツデンをつけてあげましやう。もうまるで世間を離れてをりますのですから、貴方がお迷ひになつたのも、無理もないことですとも。私、この家の表のところで御案内いたしましたしやう、でも、願ひですから、庭を出ぬけるうちは極徐かにいつて頂けまますまいか、何うぞ是非。満更下らないこととも思召さなくつて？』

『この位に走らせませすから、御安心を』私は云つた、して、車の自然敷石の



上を軋りいくに任せた。

兩人は家の左翼をぐるりと繞つたが、如何にも精巧に鑄なしてある、あの鉛の樋だけでも、わざ／＼一日がけで見に来る値打が確かにある、赤い煉瓦塀の下の、薔薇のはひ纏はつてゐる大きな門を潜つて、それから高い家表のそこへと出たが、その美しさと厳さに於て、これまで自分の見た何れにも劣らず、つと後面よりは立ち優つてゐるのであつた。

『ま、そんなに美しいのですか』私の頻りと感心してゐるのを聞き、思ひ入つて彼女は云つた。『して、あの鉛の模様もお氣に召して？ 後には古い躑躅園がありますのです。この邸は子供の爲に造へたものに違ひないと、皆申してをります。何うぞ、ちよつとお手をお貸し下さつて。追分のところまでお伴をしたいのですが、彼等をおいては参れませぬので。お前かへ、マツデン？ このお方を追分まで御案内して貰ひたいのだが。道をお迷ひになつたのだから、でも——彼等を御覽になつたのだよ。』

執事は音もさせず先づ表門ともいふべき、不思議な、古い檜の扉のところへ現はれて、帽子を被らうとか、するつとまた傍へ退いた。彼女は緑の眼をぱつと開いて、私の方を見入つて立つてゐるが、そこには些かの視力も浮んでゐない、して、この時始めて、つく／＼美しい人と私は思つた。

『何うぞお忘れないで』彼女は靜かに云つた。『彼等がお好きなら、是非またお出で下さるやうに』して、つと家のうちに消えて仕舞つた。

執事は車中で一言も口を開かなかつたが、やがてもう門番所の門へも近いといふ頃になつて、私は繁みのなかに紺の外衣をちらと見たので、思ひきつてぐつと車の向きを轉じた、童兒達を遊びに屈托させるその同じ魔の、ひよつと自分を誘つて、子供殺しといふことに立ち到らせやうとも心配して。

『失禮ですが』彼は突然訊ねた。『何でお曲りになつたのですか、且那。』  
『向ふの子供さ。』



「紺服の我家の若旦那ですか。」  
「勿論。」

「もう大變に駆けまわるのでございます。噴水のところで御覽でしてたかな？」

「見たともね、五六度も。こゝから曲るのかな？」

「左様でございます。それに、二階にゐるのも御覽におなりで？」

「階上の窓のところで？左様、見たさ。」

「女主人がまだ出て参らないうちでございましたか。」

「そのちよつと前だった。何でそれを訊くのかね？」

彼はちよつと間をおいた。「なに、ちよつと念の爲め伺つておきますので——彼等がこの自動車を見ましたか何うかを。旦那、あの子供が駆けまわつてをりますと、そりや十分氣をつけて御しておるでは違ひないのですが、つひ椿事の有り勝ちなものですから。唯それだけのことなの

で、旦那。こゝが追分です。これから先きは、何うしたつてお間違へになることはありません。難有うございます、でも、手前共では左様いふことになつてをりません、あの——」

「や、こりや失敬」私は云つて、つとその大英銀貨をかいやつた。

「や、なに餘所では皆差支ないのですが。さよなら、旦那。」

先生忽ち業體柄の甲鐵張りの司令塔のなかへと退却して、さつさと歩き出していつて仕舞つた。主人家の名譽を損じまいと心懸けてる、また女中なりを通ほして、その子供部屋に少からず興味をもつてゐる執事殿に違ひない。

追分の道標を出抜けて仕舞ふとすぐ、自分は振り返つて見たが、皺くちやだらけの山々は固く互ひに重なりあつて、あの家のある方など、一向に當りがつかないのであつた。路傍のとある田舎家で屋敷の名前を訊ねて見たが、そこで菓子を賣つてゐる肥つた女は、自動車なんか持つてゐる奴



は、生きてゐる権利も餘りないのだ——まして『馬車連と同じ物言ひをしし歩きまわる』なんて以ての外とやうの意を仄めかした。自動車へ乗るものなど全體餘り氣持の好い舉動の輩ぢやないと云ふのだ。

その晩自分の走つた跡を地圖で當つて見たが、更に發明するところもなかつた。ホオキンス・オ、ルド・フア、ムといふのが、測量圖にあらはれたそのあたりの名前らしい。大體洩れのない古い『郡報』にも更にそのことを記してない。あの邊での大きな家といへば、亂暴至極な鐵の彫物でも分つてゐる、あのジョオジャン式の上へヴィクトリア朝初期の裝飾を施したホドニングトン館である。私はこの難題を近處の知合へ——大分と深くこの土地へ根城を据えてゐる——と持ち込んだ、してその男は左る舊家の名前を自分に示してくれしたが、それが更に自分に取つて何の意味をも告げないのであつた。

一月かそこらして私はまた出かけた——否、自分の自動車にひ

とりでに其方に向つたのかも知れぬ。實りなき岡を越え、麓の曲りくねつた小路を隈なく縫つて、ところ狭く生ひ茂れる木の葉に齒も立たぬ、墻壁高き森中にと踏み入り、先頃執事と別れた追分のところへ出たが、これから少し先きへいつたところで、車體の故障が甚くなつて來たので、已むなくとある草だらけの廢路へと車を轉じたが、路は夏の日の靜かな榛の森へと喰ひ入つてゐる。日の工合と、六吋の陸軍測量圖とで確かめ得られたところでは、こゝは自分の始めに上の高地から跋涉して來た、あの森の側面の路に違ひない。私は大々的の大きさに修理の工事をやり出して、道具筐やら、螺旋廻しやら、唧笛やらのきら／＼いふ店をいつぱいにひろけて、それ等をば極めて行儀好く毛布の上へ列べた。なべての幼いものを捕まへやうといふに、この位好い良はない。斯ういふ日には、あの子供達も屹度近間に來てゐるやうと推したので、仕事の手をやめて耳を澄したが、林中は夏の日の賑やかな音に充ち／＼て、(鳥のつがひはもう濟んで仕



舞つてゐるのだが、始めのうちといふもの、私はこれ等鳥の音と、そつと枯葉を踏みしめて此方へ寄つて来る小さな忍びの足音とを聞き分けることが出来なかつた。いきなり如何にも面白さうにベルを鳴らしても見たが、小さな足はそつとまた逃げ出して仕舞ふので、こりやしまつたと忽ち私は後悔した、子供にすると、急に消魂しい音を立てられるは實に怖いものなのである。ものゝ半時間も仕事をしたと思ふ頃、「子供達、まあ、子供達つたら！何處にゐるのだね？」と、あの盲女の林中に叫んでゐるのを私は聞きつけた、して、森の静けさは飽くまでもその餘韻を傳へて洩らさないのであつた。幹の間をなつかば手さぐりで、彼女は私の方へとやつて來た、で、一人の子供がその袴の裾へまつはり縋つてゐるやうであつたが、こなたへ彼女の近寄るにつれて、子供はまた兎のやうに繁みのなかへ外れて仕舞つた。

『貴方でゐらつしつて？』彼女は云つた。『あの郡領のすつと向ふの方

の？』

『左様です、私です——郡領のすつと向ふの。』

『では何故上の森からおるでにならなかつたのです。今しがた皆あちらにゐましたのですが。』

『ちよつと前此處にをりましたのです。この自動車は破はれたのを知つて、見物に來たのだと思ひますが。』

『大したことではなければ宜しうございますが？一體自動車は何んな風に破はれるのでございますか。』

『破はれ方には五十種もありますが、生憎と此奴は五十一番目といふ破はれ方をしましたので。』

ちよつとしたこの冗談に、彼女は元氣好く笑つた。心地好氣にく、と笑ひこけて、帽子を後へとかいやつた。

『ちよつと聽かして頂戴』彼女は云つた。



『お待ち下さい』私は叫んだ。『布團を取つて上げますから。』

用意の小道具をいつばいに列べた毛氈の上へその足を据えて、彼女は凝つとその上に見入つてゐる。『何といふ面白いものでせう！』それを頼りにかいさぐつてゐるその双の手は、班の日の光にちらと輝いた。『ここにも筐が——こちらにもまた、ま！貴方、買ひ物ごつこでもなさるやうにお列べになりましたわね！』

『實はあの皆を惹きつけやうと思つて、斯う列べたのです。實際この半分も要らないのですが。』

『まあ、御親切な！私上の森で貴方のベルの音を聞きつけましたのです。皆その前からこゝにゐたと仰つしやいますの？』

『何うも左様のやうです。何でそんなに羞恥むのでしやう。今しがた御一緒におるでの紺服の坊つちやなんぞは、もういゝ加減怖じ氣が取れてもいゝんですが。宛然亞米利加の土人か何かのやうに、ぎよつとし

て此方を見てゐたんですから。』

『そりや貴方のベルに違ひありませんわ』彼女は云つた。『私がこちらへ参りしなに、一人が何か困つたといふ風で通りすがつていくのを聞きましたから。彼等はほんとに羞恥むのです——私に對してさへ羞恥むのですから。』肩越しに後ろへ顔を向けて、また彼女は叫び出すのである。『子供達、まあ、子供達つたら、まあ、御覽なさいつたら！』

『何か別に面白いことでもあつて、一緒に往つて仕舞つたに違ひないのです』私はそれとなく云つた、二人の後の方で何やら聲をひそめて話しあひ、折々急にきつきと子供の忍び笑ふのが聽えたから。私はまた自分の鍛冶屋の仕事にと戻つたして、彼女は頬杖をついて、前方へとよりか、つて面白さうに聞き耳を立て、ゐる。

『一體幾人おるでなのですか』私は到頭訊いた。仕事は濟んで仕舞つたが、別にすぐ出かけにやならんわけもないやうに思つたので。



考へ込むといつた風に、前額ひたへにちよつと皺を寄せた。「さあ何うもよく分らないのですが」彼女は無造作に云つた。「多い時もあり——また少い時もあるのです。私が可愛がつてやるので、皆みんなあ、して宅へ参つてゐるのですから、ね、貴方。」

『そりやさぞ御愉快なこつて』抽斗ひきだしを入れながら私は云つた、して、斯う云ひつ、も、我ながら自分の受け答の馬鹿氣てゐるのにあきれたのであつた。

『貴方——貴方は私を嘲笑わらつちやるらつしやらないでしやうね』彼女は叫んだ。『私——私、自分のといふのは一人ひとりもないのです。結婚といふ事をしないのですから。彼等あいらのことで折々私を嘲笑わらふ人もあるのです、と申すは——と申すは』

『先方まきが野蠻だからで』私は應へた。『別に氣を悪くなさることはないのです。あ、した輩やからは、兎角喰くらひ肥ふとつてゐる自分達の知らないことは、何

でも嘲笑わらひたがるのですから。』

『分りませんわ、分る筈はずもないのですから。私唯彼等あいらのことで嘲笑わらはれたくないのです。ほんとに傷つけられますから。それに、眼の見えないものといふと……私間まが抜ぬけたやうに思はれたくないのです』斯う云ひながらその腮ほほの、子供のそののやうにいぢらしくも顛ひんへるのでした。

『でも、私達盲人めくらといふものは、一ひとと皮かわしきやないのでしやう。何に依よらず外面おもての事が直ぐにつと胸を刺すのです。そりや貴方がたは違ちがひますわ。貴方がたは眼といふものに立派な防禦まもりをおもちですから——ちやんとそれが見張みはりつてゐて——誰にも本當に胸を刺されるといふことはないのです。皆様私達に對して、こゝのことを忘れてゐらつしやるのです。』

自分おれはあの無盡むじんの事柄ことがら——祖先より受け繼いだといふ以上の（心して立派に教へこまれもするのだから）、あの耶蘇教徒の殘虐無情といふことを繰返し考へて、言葉もなく久しほらく黙つて仕舞つた、實ひにそれに比べ



ては、あの亞弗利加西岸の黒奴風情とて、まことに潔白で、また愼みがあるといふもの。我れと我が身に立ち入つて深くも自分は考へ込むのであつた。

『そんなことなさらないで！』その眼に手をかざしながら彼女は云つた。

『何をですか？』

彼女はその手で何やら物眞似をする。

『これですわ！ もう——もう、すつかり紫と黒ですわ。何うぞお廢しを！ その色は身を刺すのです。』

『でも、ま、一體何うして色といふものを御存じなのですか』私は叫んだ、これこそ實に珍らしい示現であるから。

『色を色として、すか』彼女は訊いた。

『否。貴女が今御覽になつたその色です。』

『貴方、よく御存じでゐらつしやるわ、私も同じに』彼女は笑つた。『でなければ左様お訊ねになる筈がないのですから。私の申す色といふのは一つも實際にあるのではない。皆貴方がたのお心のうちにあるのです——大變にお怒りになつた時に。』

『あのどんよりとした紫のやうな點を仰つしやるのですか、葡萄酒に黒汁を雜ぜたやうな？』私は云つた。

『私、黒汁も葡萄酒も見たことはないのです。でも、色は雜ぜられないものです。別々なものなのです——皆別々な。』

『紫のなかへ通つてゐる黒い線やらぎざぐざを仰つてやるのですか』彼は黙頭いた。『左様です——斯ういふのでしたら』と、彼女はまたその指でぎざぎざを描いて見せるのでした。『でも紫といふより、赤といふ方です——その嫌やな色といふのは。』

『それに、あの何に依らず貴方がたの御覽になるものの頭上にある色は



何でしやうか。』  
徐かに彼女は前屈みになつて、毛氈の上へと玉子の形を描きなすのでした。

『斯ういふ工合に見えるのです』。彼女は草の莖で指さしながら云つた。  
『白、青、黄、赤、紫、して、皆様が怒つたり、心の悪い時分には、赤のなかへ黒が入るので』。今しがた貴方のなすつたやうに。』

『一體誰がその事を貴女にお教へしたのですか——抑もの當初に』。私は問ひ正した。

『色のことをですか。誰にも教はりません。小さい時分には、色といふものは何んなものかと、よく訊ねたのですが——卓子掛けや、窓掛けや、敷物の、ですね——色に依つては大變氣を悪くすものもあり、また、大變に楽しくさせるものもあるですから。皆が云つてくれましたで、大きくなつてから、左様いふ風にして、私人を見たのです』。また彼女はあの玉子

の輪廓を描くのでした、とんと我々には見られないそのかたちをば。

『全く御一人でお考へで？』。私は繰返した。

『全く一人で。誰も他にはなかつたのです。他の人には色が見えないといふことは、後になつて漸つと分つたのでした。』

幹に凭りか、つて、何氣なしに摘んだ草の莖をば、彼女は編み且つ解いてゐた。森の中の子供達は段々と近寄つて來たが、栗鼠のやうに巫山戯てゐるのを流目に私は見た。

『もう私をお嘲笑ひになるやうなことはありませんと思ひます』。久らく言葉の絶えたあとで彼女は續けた。『また彼等をも。』

『や——何ういたして』。私は叫んだ、急に自分の思想の連続から揺るぎ出て。『子供を嘲笑ふ男は——子供の方でも嘲笑つてゐないとしたら——そりや全く邪宗徒です！』

『左様いふ積りで申したのではないのです。そりや貴方は、子供を嘲笑



ふなんてことはなさらないでしやうが——私始終思ひますのは——もしか彼等あいらのことでお嘲笑ひになりなすまいかと。ですから、何うぞあのお容るしを願ひます……あら、何をお嘲笑ひになるの？」

何も聲を立てたのでもないに、ちやんともう知つてゐる。

『貴方がお容るしを願ふと仰つしやつたその事を考へてです。國家の柱石として、大地主の一人として、貴女の任務を果たされたとしたら、此間このあいだ私がこの森へ車を乗り入れた時、侵入罪として召喚しなけりやならんのでしたに。實にお恥かしい話です——斷じて容るし難いことです。』

彼女かれは私を見た。頭つむりを幹へと凭せかけて——久らく、また凝つと——赤裸々に人の魂こころを透視し得るこの女は。

『何て妙なのでしやう』彼女はなかば囁いた、『まあ實に妙ですこと。』

『ま、何か失禮なことでも？』

『貴方、お分りにならない……それなのに、色のことは分つておるでにな

る。貴方、お分りにならない？』

何とも合點のいかぬ熱い思ひを籠めて彼女かれは語つた、して、その立ち上るにつれ、私は當惑顔に先方さきと面おもてを合せたのであつた。子供達は茨の繁みの影に圓陣をつくつて集つてゐた。澤々つやした一つの頭つむりは、何やら小さなもの、上にしのか、つてゐる、ずらりと小さい肩の列んでゐるので、こりや指を唇にあて、ゐること、知つた。彼等あいらも亦子供相應の何か大變な秘密を有つてゐるのである。あかく、と日の照るなかに、自分獨りが途方もなくそこに迷ひあぐんでゐるのであつた。

『え、何どうも』云つて私は頭つむりを振つた、死したるその眼もまたこれに氣づき得るか、のやうに。『何ういふことにもせよ、まだ一向合點が參らんのです。後のちになつたらまた分りも致しましやうが——また參邸あがつても差支さしつかえないなら。』

『またゐらして下さいましやうね』彼女かれは答へた。『屹度きつとまたゐらして



下さいましやうね、そして、あの森のなかを歩いて？」

「その時分には子供衆も私に馴染んで、一緒に遊んで下さるでしやう——特別の好意を以て、す。子供といふものは左様したものですから。」  
 「特別の好意などといふ事ではないのです、當然の権利なのです。」彼女は答へた、して、自分の何の意味かと判じかねてゐるうちに、髪ふり亂した一人の女が、突然往來の曲り目へ現はれて來た、髪も上げず、紫色になつて駈けながら苦しさに牛のやうな聲を出して。かねて見知つたあの菓子店の、亂暴な肥つた女である。盲女は聽きつけて、つと進み出ていつた、「何うおしなのだね、メエドハアストの女房さん？」  
 『彼女は訊いた。』

女は前掛を頭へひつかぶつて、もう全く文字通り土のなかへ這ひこりけて、今孫が危篤である、生憎と土地の醫者は釣にいつて留守である、母親のジエニーが途方に暮れてゐるといふやうなことを、泣いたり吠えたりして幾度となく繰返すのであつた。

『次の手近の醫者といふのは何處でしやうな』泣き叫ぶそのあひに私は訊いた。

『マツデンが知つてゐます。家の方へまわつて、彼をお伴れ下さい。私が此方を監ますから何うぞ早く！』なかば抱へるやうにして彼女はその肥つた女を木蔭へつれていつた。ものの二分も経たぬうち、私はあの『美はしの館』の家の下をば、一生懸命エリコの警笛を吹いてまわつたが、マツデンはやをら臺所から起ち上つて、執事らしく、また人間らしくこの危機に應じてくれた。

規則以外の大速度でももの十五分も走つて、やつとのことで五哩先きのとある醫者をつかまへた。半時間と経たぬうち、自動車には大分の興味を有つてゐる彼をば、大急ぎであの菓子店へ下ろし、車を街道の先きへ据えて、宣告如何にと待つてゐた。

『なか／＼役に立つものですか、自動車つてものは』今や満身悉く生き



た人間で、執事の氣振りも留めぬマツデンは云つた。『我家のが病氣に罹つた時一臺持つてゐたら、死なずに濟んだのでしたらうに。』

『何うして亡くなつたのかね』私は訊いた。

『喉頭炎でした。恰度家内は留守ですし。誰も何うして、か分らなかつたのです。馬車で八哩も醫者を迎ひにいつたのですが、歸つて來ると、もう息がとまつてゐましたのです。これが一臺ありさへすりやあ、彼女<sup>れいのち</sup>の生命も助かつたんです。今までもますと、をつつけ十歳になつたんですが。』

『そりや氣の毒な』私は云つた、『此間追分まで送つて貰つた時の君の口振りでは、大分子供が好きのやうに思つたが。』

『旦那、また彼等を御覽でしたか——今朝？』

『あ、見た、皆よく自動車には馴れてゐて、一人だつて二十碼と近くへ寄るものがないんだから。』

彼は注意して私の方を見た、斥候が見知らぬ男でも檢するやうに——下男<sup>した</sup>のものが神様といふ位にゐる上の人<sup>かみ</sup>に對してその眼をあけるやうではなく。

『ま、何ういふ理由なのでしやう』ひいたその息にちよつと高い位な聲で彼は云つた。

二人は續いて待つてゐた。海から來る微風は森の長い引き續きにあちこちと漂ひ當つた、もう夏の塵で白くなつてゐる路傍の草は、青白い波をなして起伏してゐる。

石鹼の水を腕から拭ひ落しながら、一人の女が菓子屋の隣の田舎屋から出て來た。

『俺後の庭で聞いてゐただが』女は元氣好く云つた。『ア、サが馬鹿に悪いのだよ。今聲を立て、泣いてんのを聞いたがな。馬鹿に悪いのだよ。來週にもなつたら、今度はジェニーが森をぶらつくだらうと思ふが』



ね、マツデンさん。』

『失禮ですが且那、膝掛が落ちさうでございますから』敬々しくマツデンは云つた。女は驚いて、丁寧な辭儀一つして、急いでひつこんで仕舞つた。

『森をぶらつくといふのは何ういふことかね？』私は訊いた。

『何かこの邊で申す言に違ひないんですが。手前もノオフォ、クから参りましたもので』マツデンは云つた。『主人家もこの郡では全然他に關係はないのでして。あの女は貴方を運轉手と間違へましたのです。』私は醫者がその百姓家から出て来るのを見たが、一人のだらしない、ひきずり女が跡をついて来て、自分の爲めにお醫者が死の神と妥協でも出来るかのやうに、その腕へしがみつくのであつた。『あいでも』おろく、聲で女は云つた——『あいでも生みの親の俺共には、世間晴れて生れたと變りはないで。ちつとも變りはないで——ちつとも變りはないで！貴

方がお助け下さりや、神様もやつぱり喜びますわな、お醫者さん。何うかあれを亡くさいで。フロレンスさんだつても同じに仰つしやるに違えねえでしやう。彼の傍を離れいで、お醫者さん！』

『承知しとるよ、承知しとるよ』醫者は云つた。『でも今のところ暫らくは鎮まつとるだらう。大急ぎで看護婦を迎ひにいつて薬を取つて来るから』自動車をもつて此方へと、彼は目顔で知らした、して、自分は事の成行には深く與るまいと努めてゐた。が、悲痛の爲めに汚れ、氷つてゐる娘の顔が私の眼に入つた、して、車を出さうとすると、指環もはめぬその手で私の膝にしがみつくのに氣づいた。

醫者はちよつと氣輕の男で、藥神の御命令ぢやと此方の自動車を我物顔に、私諸共容赦會釋なく使ひこくつた。先づ看護婦の来るまで病床の世話をと、メエドハアストの女房と盲女とを乗せていき、それから、處法の薬を得る爲め（病症は腦脊髓炎だと醫者は云つた）、小ざつぱりし



た町へと襲つたが、吃驚顔の賣物の家畜がいつぱい前に並んでゐる郡立病院で、看護婦が出拂つて仕舞つて、さし當り一人もゐないと斷はれた時は、二人は田舎の方へと文字通りに全く飛び出したのであつた。大家の持主——蔽ひ重さなる、遠い並木路の果に住ひ給ふ貴人の方々とも相談したが、頑丈さうな召使の女共は、木蔭の茶の卓を離れ、此方へと歩き出して来て、手もつけられぬ劍幕の先生の申條を謹聽した。やがて、檜の大本の下に坐つて、ずらりとゐる列んでゐる、幾頭かの美事な露西亞犬——何れも自動車には敵意をもつてゐる——に取圍まれてゐる、白髪の一貴婦人が何やら書付を下すつたが、先生貴妃の御手簡でも給はつたやうにこれを推し頂いて、もう絶頂といふ急速力で、幾哩の遠い路をもつていつて、やがて廣い邸地を通つて、とある佛蘭西の尼僧院へそれを持ち込んだが引き換へに、色蒼ざめたぶる／＼ものの尼僧一人を乗せて來た。尼僧は車箱の底に潛くまつて、しつきりなしその珠數をつまぐつてゐるが、や

がて先生發明の近路を通つて、無事に菓子屋の店へとその尼さんを届けた。實に車輪の塵のやうにも起ち昇り、また散じたさま／＼な、物狂ほしい小事件、我等の眞角にそのなかを走つた、縁遠い、また推し測り難い、さまざまの生の横断面の群がり充ちた永い午後であつた。して、自分は疲れきつて、黄昏の頃に我家へたどりついたが、その夜は角つきあはす家畜の群や、墓のある庭を散歩してゐる圓々した眼の尼僧達、木下蔭の樂しさうな茶の集ひ、郡立病院の石炭酸臭い、灰色に塗つた廊下、林中の恥かしさうな子供の足音、自動車の出だした時、自分の膝にしがみ寄つたその手、ば私は夢見た。

一日二日のうちにまた出懸ける積りであつたが、氣まぐれな『運命』の神は、いろ／＼な口實で、成るべく自分をあの方面へ觸れさせないやうにするので、やがて早咲きや野生の薔薇の咲き切つて仕舞ふ頃となつた。



とう／＼西南の方から綺麗に晴れて来た日和の一日は来た、山々は手に取るやうに見え、そよ／＼と風の吹いて、薄つすりとした雲の高く懸つてゐる日であつた。自分の手柄といふではないが、その日恰度何のさえもなかつたので、これで三回目である。私はあの馴染の街道へと自動車据えたのであつた。岡の頂きまでいくと、柔かな空気は急に變るやうに思はれ、日に映つて透き通るやうに見えた。して、海の方を見下ろすと、その刹那に海峽の青海原は、磨き上げた銀と、くもつた鋼鐵のやうな色を経て、煤けたやうな錫の色に變つていくのが見えた。海岸近くにあるた荷を積んだ石炭船は沖の深い海へと出ていつた、して、銅色をした霧の彼方には、錨を下ろしてゐる漁船の一群の上に、一つ／＼白帆があがつていくのが見えた。背後の深い峽間には、一陣の旋風が谷深くかくれた檜の間に吹き起つて、秋の枯れ葉の最初の幾枚かを、ひらく／＼と高く捲き上げた。濱街道へ出ると、海霧はいつばいに廣い煉瓦工場の上に立ち籠めて、潮流は

アシヤントの島のさきなる強風のあらゆる呻きを傳へて来る。一時間とも経たぬうちに、夏の英吉利は冷たい灰色のうちに消えていき、我等はまたもとの閉ざられたる北海の島國となつて、世界の如何な船も皆危きこの水門に来て、けた、ましい警笛を吹く、して、その叫び聲の間に、迷へる海鷗の鳴き聲のきこえるのであつた。私の帽子からは滴が垂れ、膝掛の毛布の襷はいつばいに水を溜めるか、細い流となつて水を推し流す、して、唇には鹽霜のひつুকのであつた。

陸の方では、秋氣凝つて、木々の間なる濃霧と化し、滴は落ちて絶えざる雨をなしてゐる。けれども、遅咲きの花は——路傍の錦葵、野の山蘿蔔、庭のダリヤなど——まだ華やかに霧のなかに咲いてゐる、して、海の息の外には、少しも凋落の氣はひは見えないのであつた。村では皆扉を開け放つて、帽子もかぶらぬ子供達が、うちしめつた門の段々のところにゆつたりと坐りこんで、通りが、りの人を見ては、からかひ面に呼びかけてゐる。



私は思ひきつて菓子屋の店を訪ねて見たが、メエドハアトスの女房は、あの肥つた身體をして、愛想の好い涙をもて私を迎へ、ジェニイの子供は、尼さんが来てから二日して死んで仕舞つた、何うなり片づいて仕舞つたのは、何より仕合せと自分は思つてゐる、保險會社も——その理由といつては自分には分らないと正直に云つて——あんな紛れ者の保險はつけないので、一文も取れるといふわけぢやないけれど、『ジェニイの奴が最少しア、サの面倒を見てくれ、ばよかつたが、生れて一年も経ちやあ——彼奴も左様だつたが——すつかり治つちもう位に思つて、まるで放つてをいたんで、これだけは残念ですが。』といふことであつた。フロレンス嬢のお蔭で葬式もちよつと立派に出来たので、女房の考によると、これでその恥かしい生れも十二分に隠蔽れて仕舞つたといふもの。棺の模様やら——その内外の——玻璃の柩車やら、墓の常盤木の縁飾りやらを巨細に女房は話し立てた。

『でも母親は何うしたね』私は訊いた。

『ジェニイの奴ですか。なに彼女はすぐ何でもなくなつちまいますわな。俺も自分のを一人二人亡くした時左様でしたから。すぐ何でもなくなつちまいますわ。彼奴、もう森をぶら／＼やつてますで。』

『この天氣に？』

メエドハアトスの女房は勘定臺の向ふから、凝つと眼を細くして私を見た。

『何だか分りましたねえが、まあ胸が開けるのでのしやう。左様です、胸が開けるですよ。それでまあ、亡くしたり生したりも、とゞのつまり平均になるんだつて、こゝらぢやあ云つてますんで。』

何うして婆さん達の大悟つてものは、歴代の高德のそれよりかずつと豪いものである、して、この最後の托宣は、街道を走つていきながら、それからそれと色々の事を自分に考へさせたので、あの『美はしの館』の門番所



の傍の森のある角のところ、最少しで通りが、りの母子の者をひいて仕舞ふところであつた。

『厭な天気だね！』私は叫んだ、曲るところで、した、か車の速力を弱めて。

『左様でもありませんよ』女は霧のなか、ら落ちついて答へた。『宅の奴などは馴れてるんですから。且那も屋内へお這入りになりや、可愛いのがるまじやうがな。』

屋内へ這入ると、マツデンは例の業體柄鄭重に私を迎へて、自動車に故障はないかと親切に訊ねて、そのま、戸外へおいてはいけぬと、色々世話をやくのであつた。

私は秋の花で楽しさうに飾られた、結構な薪の爐火で暖かさうになつてゐる、静かな胡桃が、つた褐色の玄關の間に待つてゐた——如何にもその徳に化せられさうな、何とも實に静かな部屋であつた。(男女はその

大努力に依つて、往々眞實らしい僞虚も遂け終ふせるが、宮殿ともいふべきその家こそ、うちに住つてゐる人々の真相をおいて、何物をも外に語り得ないものなのである。乳母車と人形が、黒白の石疊みになつてゐる床の上にあつて、一枚の毛氈が蹴返したなりになつてゐる。何やら子供達が、たつた今急いで逃げ出していつたやうに自分には思へた——多分はこの玄關の間から上の方へと立派に延びてゐる、大きな手斧削りの梯子段の數ある曲りのうちに隠れる爲め、でなくば階上の彫刻のある廻廊の獅子やら薔薇やらの影へ腹這ひになつて下を見下ろさうといふ爲めに。すると自分の頭の上で歌つてゐるあの女の聲が聴えた、盲人のすなるやうに——心の奥底から歌つてゐる——

楽しき果物園のなか

してその呼び聲に、我が初夏の光景は悉く眼前に浮び出でたのであつた。



楽しき果物園のなか、

なべての得を惠ませ給へと我等いふ——

なれど、神なべての失をも惠ませ給へてよ、

これぞ我等が境にふさはしきものなる。

全體の調子を破はす第五の句をわざと省いて、またこれを繰返した——

これぞ我等が境にふさはしきものなる。

私は彼女が階上廊に凭りか、つてゐるのを見た、組み合せたその手は欄の檜との對照でくつきりと白く。

『貴方であるらつしやるの——郡領のすつと向ふの？』彼女は呼んだ。

『さう、私です——郡領のすつと向ふの』笑ひながら自分は答へた。

『まあ、久らくでおるでになつたわね』彼女は二階を駆け下りて來た、一方の手で軽くその廣い欄へつかまつて。『恰度二た月と四日ですわ、夏も過ぎて仕舞ひました！』

『前にあがる積りでしたが、運命の神にさえられて。』

『そりや存じてゐますわ。何うぞ、その火を何うかなすつて。私には手をつけさせないのですよ、でも、私、何ですか餘り行儀好くしてゐないのが分りますから。打つてやつて頂戴！』

私は深い爐の兩側をさがしたが、半分炭になつた生垣の杭しきやないので、それで眞黒な薪木を突いて、ぱつと燃え立たせたのであつた。

『もう消えることはないのです、晝でも夜でも』彼女は云つた、言譯とでもいふやうに。『誰にせよ、冷たい足をして這入つて來た時の用意にです。』

『外側から見ると家内はまた一段と美しいですな』私は呟いた。赤い光は時代のついた黒ずんだ欄間へと流れ注いで、階廊の彫りの、テユウダ



ア式の薔薇や獅子はばつと色づき揺らぐのであつた。古い、鷲の飾りのいつた、中高の鏡は不可思議なその胸にとこの全景を集めて、歪んだ影をばまた歪め、階廊の輪廓は曲線をなして宛然船のやうに見えるのでした。霧が篠つく急雨と變つて、日はなかなば暴風雨のうちに暮れか、つてゐる。帷幕のない、廣い窓の、堅子の間から、私はあの庭の勇ましい騎士の、幾萬の枯れ葉の軍兵で彼等を攻め立て、ゐる風雨にひるまず、優にこの陣地を保つてゐるのを見た。

『さう、美しいてございませうよ』、彼女は云つた、『貴方、階上へいつて御覽になりませんか。まだ彼處は明るいでしやうから。』

この女の跡を跟いて、思ひきつて、荷馬車のやうに廣い梯子段をば、私は階廊へと登つていつたが、そこから薄い、溝彫りのある、エリザ朝式の扉があいてゐた。

『觸つて御覽なさい、子供達の爲めにと、掛金がすつと下へつけてあるの

です。』

彼女は一つの軽い扉を内へと推した。

『それはさうと、皆何處にゐるのでせうな？』、自分は訊いた。『今日は聲も聽かんですが。』

すぐには彼女は答へなかつた。すると、『私、唯聲を聴くばかりですわ』、彼女はやさしく答へた。『これが彼等のお部屋の一つでして——すつかり整つてをりませうね。』

彼女は太い材木の梁のある部屋へと指ざした。折り疊める小さな、低い卓子や、子供の椅子などがある。人形の家が一つ蝶番ひでついでゐる。前面の扉がなかなば開いたなりで、大きな連錢栗毛の揺り馬に向つてゐたが、ふつくらとしたこの馬の鞍から、子供の足でも、ちよつと向ふの、一面に庭を見下ろす窓臺へ登れるのであつた。玩具の鐵砲が、隅の方に金ぴかの木製の、大砲の傍にころがつてゐた。



『てつきり今出ていつたばかりですな』私は小聲で云つた。薄明りのなかで扉のそつと犇む音がした。通衣の衣すれと、ばたくいふ足音が聴えた——先きの部屋を駈けぬけていく速い足音が。

『聴えましたわ！』如何にも得意氣に彼女は叫んだ。『貴方お聴きになつて？お前達、まあお前達！一體何處にゐるんだね？』

聲は四壁のうちに籠つて、美しくも最後の餘韻をも洩らさない。が、先きに自分が庭で聴いたやうな答は更にないのであつた。二人は櫛板の床の部屋から部屋へと急いで、こゝで一段登り、かしこで三段降りといふ風に、迷宮のやうな廊下を通つていつたが、いつも先方に馬鹿にされるばかりで、更に獲物とははない。てもなく唯一匹の鮎で圍ひのない兎園を狩り立てるやうなものである。幾つともなく大釘の穴がある——壁のなかの隠れ家、今は塞いで仕舞つてある、深く切つ立てた朝顔形の窓があつて、此方が通つたあとから急に駈出す。壁の中へ六尺も深く入

つてゐる、今はもう使はれぬ爐やら、また幾重にもかさなつてゐる抜け道の扉が幾つとなくあるのであつた。殊にはこの遊技で先方の味方として薄明りといふものがある。一二度向ふが逃げて、嬉しさうにせ、ら笑ふのを私は耳にした、一二度は廊下の最端の方の、黄昏れゆく窓に子供の通衣の影の黒く映るのを見たが、兎も角空手で前の階廊へ歸つて來ると、恰度年増の女がその凸みへと燈火をおいてゐるところであつた。

『え、今晚まだ私も彼女に逢はないのですよ、奥様』私はその女の云ふのを聞いた。『でも、あのタバピンが、何かあの牛小屋のことでお目に懸りたいと申してをります』

『まあ、ちやタバピンは大變に私に逢ひたくてゐるのでしやう。立關の間へ來るやうに云つて下さいよ、マツデンの女房さん。』

その立關の間を見下ろすと、その燈火といふのは下火になつた爐の火だけであつたが、その影の奥の方に、とうとう私は彼等を見つけたので



あつた。二人が廊下を縫つてゐるうち、彼等はそつと降りて仕舞つたに違ひない、して、今は古い、金ぴかの革屏風の後で、もう大丈夫見えないと思つてゐるのである。子供といふものの習法として、何等甲斐なき私の追驅も、紹介も同じ効力があつたのである。が、折角あれだけ骨も折つたものだから、今に一つちよつとした巧い計略で——子供は嫌ふことだが——先方に氣がつかないやうな風をして、無理にも彼等をおびき出してくれやうと自分は決心して仕舞つた。小いちやくひしとかたまつて寐ころんでゐる具合は、影としきや見えないのであるが、折々ばつと焔が射して小さなその輪廓を見せるのであつた。

『これからお茶を一つ上げますから』、彼女は云つた。『前にも差上げなければならぬのですが、何やら何うも不調法ばかりで、あの斯うして孤獨でをりまして——あの——何やら斯う變人のやうに思はれてをりますと』、斯ういつて、また如何にも美しい嘲りの調子を浮べて、『召し食

のに、燈光のありました方が宜しうございますか。』

『いや、この爐の光の方が却て氣持がよいやうです』。二人がその蜜のやうな暗がりのなかへ降り立つと、執事のマツデンが茶を持つて來た。

子供にからかふその戯れの成行で、此方が不意を襲はふが、また襲はれやうが何れにしてもよいやうにと、例の屏風の向ふに自分の椅子はおいた、して、女主人の許可を得て——爐邊といふものはいつも神聖犯すべからざるものであるから——私は少し前屈みになつて火をいぢつてゐた。『斯んな綺麗な焚附を、まあ何處からおとりになつたのですか』、何の氣なしに私は訊いた。『や、こりや符木ですな！』

『左様ですとも』、彼女は答へた。『読み書きが出来ないものですから、私仕方なしに、勘定をするのに太古のこの符木を頼りとしてゐるのです。ちよつと一つお見せ下さい、何のですか申上げますから。』

私は一尺ばかりの長さの、燃ゑない榛の符木を一本を手渡し、た、して、



しきりと親指で彼女はその切目を手探るのであつた。

『これは昨年四月の月の宅の農園の牛乳の記録なのです、幾ガロンといふ』、彼女は云つた。『符木がなければ、私ほんとに何うしていい、が分らないのです。宅の老人の森番がこの數へ方を私に教へてくれたのです。今では何處へいつたつて、斯んなものを使ふものはありませんけど、でも、宅の借地人の者は皆調法がつてゐるのです。今、その一人がこゝへ見えますが。あら、かまやしませんわ。もう用事の刻限も過ぎてますに、何にも用はない筈なのですが。もう慾張りな物を知らない男でして——もう大變な慾張りな、でなきや——暗くなつてから來ることはないんですから。』

『では、大分地所をお持ちで？』

『手許にはほんの二百エ・カアばかりしきやないのですわ、本當に。他の六百といふものは、大概皆先代から宅の者を知つてゐる人達に貸しつ

けてありますのです。でも、今こゝへ參るタアピンといふのは、もうまるで新參の者でして——それに、追剥ぎも同じな惡黨なのですから。』

『でも、ほんとにお邪魔には——？』

『もう決してそんなこと。貴方は立派に資格を有つてゐらつしやるのです。彼の男は一人も子供がないのですから。』

『あ、子供！』、私は云つて、低い自分の椅子をば、彼等の隠れてゐる屏風へ觸はらうといふと、こまで退らしたのであつた。『何うでしやう、私へのお愛想に出てくれるでしやうかしら。』

ぶつ／＼小聲の話が聽えた——マツデンのそれと、ずつと太い調子とが——低い、暗い、側の扉のところで。して、赤つ毛の頭をした、帆布のゲエトルをつけた、何う見ても小作人の百姓としきや見えない一人の大男がころけるやうに這入つて來た、否、推し込まれたのであつた。

『ずつと爐の方へお寄りなさい、タアピンさん』、彼女は云つた。



『い——いえ、何う致しまして、奥様、こち——こつちで扉の傍で、もう澤山で』物におびえた子供のやうな物言ひをしながら掛金へひつついて離れない。こりや何かもう壓さへつけられるやうな恐怖に捉へられてゐるなど、急に自分は感づいた。

『それで？』

『なにあの、生れた犢の新しい小屋を建てるに就いて、すがすがすが——それだけのことで。もうそろそろ秋の暴風がやつて來ますで……でも、またあがりやすから、奥様』。それでも、齒の根は扉の掛金位にしきやがたくは云はなかつた。

『そんなことはありませんまい』。彼女は落ちついて答へた。『新しい小屋——うゝ。宅の代人からは、お前さんの方へ十五日に何と申していきました？』

『俺——俺があがつて——直き——直き——直き——遠慮なくお話しし

たらと思ひやしたんで、奥様。でも——』

その眼は恐怖にぎよろつと圓くなつて部屋の隅を睨めつけるのでした。這入つて來たその扉を、なかば開きかけたが、私はその再び閉つたのに氣がついた——室外から、して、確かかりと。

『私の吩咐けたことを申していつたのでしやう』。彼女は續けた。『全體もう家蓄の数が餘り多すぎるのです。ダンネットの農園は五十頭より多く蓄ひつけたことはいないのですよ——前のライトさんの時でもです。そして、彼の人はちやんと食物を當てがつたのです。お前さんは六十七頭も蓄ひながら、それで少しも食物をやらないのです。それだけでも、お前さんは契約を破つてるぢやありませんか。お前さんたら、あの地所をもうだいなしにして仕舞ふのです。』

『俺——俺も礦物肥料を取寄せるところでして——來週には。もう一つ車訛へたも同じなんです。明日その事で驛まで參らうと思つてるん



です。それから明るいうちに参上りやして、直きく、に遠慮なくお話しやして宜しいで……そちらの旦那はまだお歸りぢやないんで？』彼は殆ど泣き叫ばんばかりであつた。

私はちよつと椅子を後へ退らして、手を延ばして屏風の革を叩いたぎりだつたが、先方の男はもう鼠のやうに跳びあがつたのである。

『ま、此方の云ふ事をお聴なさい、タアピンさん』椅子のまゝ、で向き直つて、扉へ背中を向けてゐるその男にときつと向つた。理づめに責めていつてたぐり出したのが、例のよくある、汚い小刀細工なのであつた——地主へ迷惑をかけて新しい小屋を建てやうといふその口實といふものが。そこへ大事に肥料を藏つておいて——これも婦人が暴露したのであつたが——散々地所を荒らした擧げ句に肥料を賣り拂つて、その金で來年の地代を拂はうといふのである。前額にいつばい冷汗をたらしてまで、飽くまで圖太くその慾を遂げやうといふには、ほとく、自分は感心して

仕舞つた。

私は屏風の革を叩くことを廢めた——否、實は小屋を建てる費用を計算してゐたのであつた——すると、恰度その時自分のゆるめた手が一人の子供の柔かな双手のうちに取られ、またそつと覆へされたやうに感じた。斯くてとうく、自分は成功したのである。すぐにも自分は振り返つて、あの足早やの漂泊者と近づきにならうと思つた……

小さな接吻は疾風のやうに私の掌の真中にと落ちた——嘗ては此方の指のそれに對して閉ぢるであらうと思はれてゐた一つの賜物として、大人の忙しとも忙しいさなかですら、かまはれないではゐない、待ちあぐんだ子供の眞實こもつた、なかばたしなめるやうな合圖として落ちた——遠うの昔に思ひつかれた暗黙の記號の一斷片ではあるが。

始めて自分は知つた。芝生を隔て、あの高い窓を眺めたその最初の日から、自分には分つてゐたやうにも思へて來たのであつた。



扉としまの閉しる音が聴えた。女は言葉もなく私の方へと向つた、して彼女も亦知つてゐるやうに自分には思へた。

これから何ういふ風に時が過ぎたか、自分にも云へないのである。爐のなかの眞木まきのがくりと落ちたので自分は氣がついた、して、器械的に起たち上あつて、それを直した。かくてまた、屏風に接した椅子なる我が座にと戻つた。

『今度はお分りでしやう』群がる影を隔て、彼女かれは囁ささいた。

『え、分りました——今度は。有難う。』

『私——私たゞ聴くばかりですの』彼女かれはその双の手のうちに頭つむりを埋めた、『私、他に資格はないのですからね——一つとして他ほかに資格は。私、今まで生みもせず、亡なくしもしないのでした——生みもせず、亡なくしもしず！』

『では、お仕合せと思召した方が』私は云つた、胸のうちでは、私の魂こころのさ

つと一時にひき裂ぎれるやうに開いたので。

『飛んだ失禮を！』

彼女さきはぢつと靜かにしてゐる、で、私はまた自分の悲喜の題目たねにと戻つた。

『何も皆大變に彼等あいらを可愛ゆく思ふからです』彼女かれはやがて、絶えく々に云ふのであつた。『その理由わけでなのです、もう抑もの始めから——それと氣づかない前から——もう彼等あいらの外に自分の持つべきものとしてないといふことに氣づかない前から。それに、私もう大變に彼等あいらを可愛ゆく思ふのですから！』

影のうちにと、影のうちなる影のうちにと、彼女かれはその腕をさしのべるのでした。

『彼等あいらは來たのです、私が彼等あいらを可愛ゆく思ふので——彼等あいらなくてはゐられないので。私——私、もう是非來て貰はなければならなかつたので



す。それが間違つてをりましたらうか、貴方左様お思ひになる？」

『否、決して——決して！』

『そりや——そりや、玩具とか何とかいふものは皆下らないといふことはよく存じてゐます。でも——でも、私、もう小さい時分から虚空の部屋は大嫌ひでしたので。彼女は階廊の方を指ざした。『それに、廊下や何かも皆がらんとしてゐては……私、何うしてあの庭の扉を閉めてなどおけましやう？ まあ、假りに——』

『お措き下さい！ お願ひですから、お措き下さい！』私は叫んだ。夕闇につれて、狂風めいて来る冷い雨は、強くも鉛格子の窓を打つのであつた。

『それにあの、終夜爐の火を絶やさないのも同じことなのです。私、さう下らないこと、は思はないのです——如何でしやうか？』

私は廣い煉瓦の爐を眺めた、涙ながらでもあつたらう、その近くに何等うち越え難き鐵圍ひなどのないことを見た、して、覺えず頭を垂れたので

あつた。

『斯うしたことやら、また他の色々のことを皆私はしたのです——ほんの唯左様した氣分を作る爲めに。すると、彼等は來たのでした。私、彼等を聴きました、が、彼等が權利として自分のものでないといふことには氣がつかかなかつたのした、マッデンの女房が私に申しますまでは——』

『あの執事の細君が？ 何をですか？』

『彼等の一人を——私は聴いたのですが——彼女はちやんと見たのでした。して悟りました。彼女のものなので！ 私のではないのです。私、始めは分らなかつたのです。私、嫉妬の念ひをもつてゐたのでしやう。後になつて何も皆唯私が彼等を愛した爲めで、他の爲めではないと、段々と分つて來たのでした……まあ、何うしても生むか、亡くすかしなければいけないのです。』如何にもいぢらし氣に彼女は云つた。『他に途はないのです。でも、皆が私を愛してくれまますから、そりや左様なけりやなりま



せんわ。左様ぢやありませんか？』

爐の火の燃え落ちる聲をおいて、部屋のうちにことゝの音もしないが、私達二人はぢつと耳を澄ましたして、彼女は少くとも何か聴きつけたことから慰めを得たのでした。氣をとり直して、半ば彼女は起ち立つた。私は屏風の傍の自分の椅子にと、ぢつと靜かに座つてゐた。

『さぞひどい奴と思召しでしやうが、斯んな泣きごとを申上げて。でも——でも、私、まるきし闇のうちにゐるのですから、ね、貴方。貴方は立派にお見になれるのです。』

實際自分には見えたのである、して、その幻影は愈私の決心を強めたのでした、靈と肉との引き離れるやうにも堪へ難く思へたのではあるが。でも、今暫らくこゝを去るまいと思つた、これがもう最後であるのだから。『ぢや、貴方はこれを間違つてゐると思召すので？』、彼女は鋭く叫んだ、此方で何も云つたのではないに。

『貴女には決して。萬々左様いふことではないのです。貴女には少しも間違つてをらぬのです……もう言葉にも盡せぬ程嬉しく思つてをります。自分に取つては、間違つてゐるのですしやう。この私だけには……』

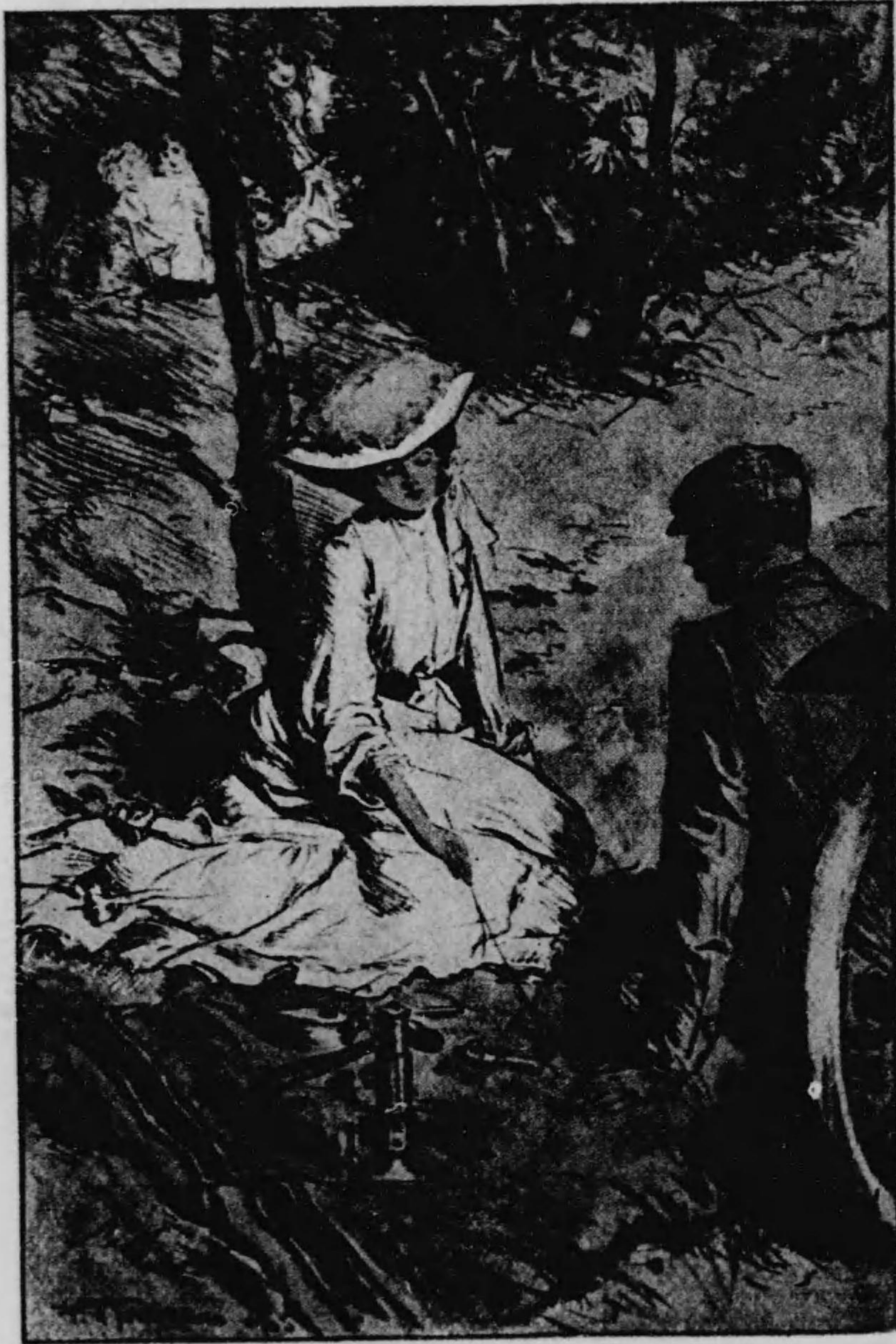
『そりや何で？』、彼女は云つたが、林中の二度目の邂逅の際にしたやうに、その手を面にかざすのでした。『あ、分りました』、子供のやうに無造作に彼女は續けた、『貴方に取つては、間違つてゐるのですしやう』。して、ちよつと呑み込むやうに笑ひを抑へて、『で、貴方覚えてゐらしつて、私がお仕合せと貴方を申上げたことを——あのいつぞや——當初のうちに。もう決してこゝへ來て頂いてはならないその貴方をば！』

彼女は、その席を去つて、私の最少し屏風の傍に座つてゐるに任せた、して自分は、その足音の階上なる階廊の方へと消えていくのを聴いた。



2462-93





'Why you've arranged them like playing shop!'—p.22

# 'THEY'

By

Rudyard Kipling

*With the Japanese Version by T. Hirata*

■

TOKYO

KENKYUSHA

1916



## 'They'

ONE view called me to another ; one hill  
top to its fellow, half across the county, and  
since I could answer at no more trouble than  
the snapping forward of a lever, I let the  
county flow under my wheels. The orchid-<sup>5</sup>  
studded flats of the East gave way to the  
thyme, ilex, and grey grass of the Downs ;  
these again to the rich cornland and fig-trees  
of the lower coast, where you carry the  
beat of the tide on your left hand for fifteen<sup>10</sup>  
level miles ; and when at last I turned inland  
through a huddle of rounded hills and woods



I had run myself clean out of my known marks. Beyond that precise hamlet which stands godmother to the capital of the United States, I found hidden villages where bees, the only things awake, boomed in eighty-foot lindens that overhung grey Norman churches; miraculous brooks diving under stone bridges built for heavier traffic than would ever vex them again; tithe-barns larger than their churches, and an old smithy that cried out aloud how it had once been a hall of the Knights of the Temple. Gipsies I found on a common where the gorse, bracken and heath fought it out together up a mile of Roman road; and a little farther on I disturbed a red fox rolling dog-fashion in the naked sunlight.

As the wooded hills closed about me I stood up in the car to take the bearings of that great Down whose ringed head is a

landmark for fifty miles across the low countries. I judged that the lie of the country would bring me across some westward-running road that went to his feet, but I did not allow for the confusing veils of the woods. A quick turn plunged me first into a green cutting brim-full of liquid sunshine, next into a gloomy tunnel where last year's dead leaves whispered and scuffled about my tyres. The strong hazel stuff meeting overhead had not been cut for a couple of generations at least, nor had any axe helped the moss-cankered oak and beech to spring above them. Here the road changed frankly into a carpeted ride on whose brown velvet spent primrose-clumps showed like jade, and a few sickly, white-stalked blue-bells nodded together. As the slope favoured I shut off the power and slid over the whirled leaves, expecting



every moment to meet a keeper; but I only heard a jay, far off, arguing against the silence under the twilight of the trees.

Still the track descended. I was on the point of reversing and working my way back on the second speed ere I ended in some swamp, when I saw sunshine through the tangle ahead and lifted the brake.

It was down again at once. As the light beat across my face my fore-wheels took the turf of a great still lawn from which sprang horsemen ten feet high with levelled lances, monstrous peacocks, and sleek round-headed maids of honour—blue, black, and glistening—all of clipped yew. Across the lawn—the marshalled woods besieged it on three sides—stood an ancient house of lichened and weather-worn stone, with mullioned windows and roofs of rose-red tile. It was flanked by semi-circular

walls, also rose-red, that closed the lawn on the fourth side, and at their feet a box hedge grew man-high. There were doves on the roof about the slim brick chimneys, and I caught a glimpse of an octagonal <sup>5</sup> dove-house behind the screening wall.

Here, then, I stayed; a horseman's green spear laid at my breast; held by the exceeding beauty of that jewel in that setting. <sup>10</sup>

'If I am not packed off for a trespasser, or if this knight does not ride a wallop at me,' thought I, 'Shakespeare and Queen Elizabeth at least must come out of that half-open garden door and ask me to tea.' <sup>15</sup>

A child appeared at an upper window, and I thought the little thing waved a friendly hand. But it was to call a companion, for presently another bright head showed. Then I heard a laugh among the



yew-peacocks, and turning to make sure (till then I had been watching the house only) I saw the silver of a fountain behind a hedge thrown up against the sun. The doves on the roof cooed to the cooing water; but between the two notes I caught the utterly happy chuckle of a child absorbed in some light mischief.

The garden door—heavy oak sunk deep in the thickness of the wall—opened further: a woman in a big garden hat set her foot slowly on the time-hollowed stone step and as slowly walked across the turf. I was forming some apology when she lifted up her head and I saw that she was blind.

‘I heard you,’ she said. ‘Isn’t that a motor car?’

‘I’m afraid I’ve made a mistake in my road. I should have turned off up above—I never dreamed——’ I began.

‘But I’m very glad. Fancy a motor car coming into the garden! It will be such a treat——’ She turned and made as though looking about her. ‘You—you haven’t seen any one, have you—perhaps?’

‘No one to speak to, but the children seemed interested at a distance.’

‘Which?’

‘I saw a couple up at the window just now, and I think I heard a little chap in the grounds.’

‘Oh, lucky you!’ she cried, and her face brightened. ‘I hear them, of course, but that’s all. You’ve seen them and heard them?’

‘Yes,’ I answered. ‘And if I know anything of children, one of them’s having a beautiful time by the fountain yonder. Escaped, I should imagine.’

‘You’re fond of children?’



I gave her one or two reasons why I did not altogether hate them.

‘Of course, of course,’ she said. ‘Then you understand. Then you won’t think it foolish if I ask you to take your car through the gardens, once or twice—quite slowly. I’m sure they’d like to see it. They see so little, poor things. One tries to make their life pleasant, but——’ she threw out her hands towards the woods. 10  
‘We’re so out of the world here.’

‘That will be splendid,’ I said. ‘But I can’t cut up your grass.’

She faced to the right. ‘Wait a minute,’ she said. ‘We’re at the South gate, aren’t we? Behind those peacocks there’s a flagged path. We call it the Peacocks’ Walk. You can’t see it from here, they tell me, but if you squeeze along by the edge of the wood you can turn at the first

peacock and get on to the flags.’

It was sacrilege to wake that dreaming housefront with the clatter of machinery, but I swung the car to clear the turf, brushed along the edge of the wood and 5 turned it on the broad stone path where the fountain-basin lay like one star-sapphire.

‘May I come too?’ she cried. ‘No, please don’t help me. They’ll like it better if they see me.’ 10

She felt her way lightly to the front of the car, and with one foot on the step she called: ‘Children, oh, children! Look and see what’s going to happen!’

The voice would have drawn lost souls 15 from the Pit, for the yearning that underlay its sweetness, and I was not surprised to hear an answering shout behind the yews. It must have been the child by the fountain, but he fled at our approach, leaving a little



toy boat in the water. I saw the glint of his blue blouse among the still horsemen.

Very disposedly we paraded the length of the walk and at her request backed again. This time the child had got the better of his panic, but stood far off and doubting.

'The little fellow's watching us,' I said. 'I wonder if he'd like a ride.'

'They're very shy still. Very shy. But, oh, lucky you to be able to see them! Let's listen.'

I stopped the machine at once, and the humid stillness, heavy with the scent of box, cloaked us deep. Shears I could hear where some gardener was clipping; a mumble of bees and broken voices that might have been the doves.

'Oh, unkind!' she said weariedly.

'Perhaps they're only shy of the motor.'





The little maid at the window looks tremendously interested.'

'Yes?' she raised her head. 'It was wrong of me to say that. They are really fond of me. It's the only thing that makes <sup>5</sup> life worth living—when they're fond of you, isn't it? I daren't think what the place would be without them. By the way, is it beautiful?'

'I think it is the most beautiful place I <sup>10</sup> have ever seen.'

'So they all tell me. I can feel it, of course, but that isn't quite the same thing.'

'Then have you never —?' I began, but stopped abashed. 15

'Not since I can remember. It happened when I was only a few months old, they tell me. And yet I must remember something, else how could I dream about colours. I see light in my dreams, and colours, but I



never see *them*. I only hear them just as I do when I'm awake.'

'It's difficult to see faces in dreams. Some people can, but most of us haven't the gift,' I went on, looking up at the window <sup>5</sup> where the child stood all but hidden.

'I've heard that too,' she said. 'And they tell me that one never sees a dead person's face in a dream. Is that true?'

'I believe it is—now I come to think <sup>10</sup> of it.'

'But how is it with yourself—yourself?' The blind eyes turned towards me.

'I have never seen the faces of my dead in any dream,' I answered. <sup>15</sup>

'Then it must be as bad as being blind.'

The sun had dipped behind the woods and the long shades were possessing the insolent horsemen one by one. I saw the light die from off the top of a glossy-leaved

lance and all the brave hard green turn to soft black. The house, accepting another day at end, as it had accepted an hundred thousand gone, seemed to settle deeper into its rest among the shadows. <sup>5</sup>

'Have you ever wanted to?' she said after the silence.

'Very much sometimes,' I replied. The child had left the window as the shadows closed upon it. <sup>10</sup>

'Ah! So've I, but I don't suppose it's allowed. . . . Where d'you live?'

'Quite the other side of the county—sixty miles and more, and I must be going back. I've come without my big lamp.' <sup>15</sup>

'But it's not dark yet. I can feel it.'

'I'm afraid it will be by the time I get home. Could you lend me someone to set me on my road at first? I've utterly lost myself.'



'I'll send Madden with you to the cross-roads. We are so out of world, I don't wonder you were lost! I'll guide you round to the front of the house; but you will go slowly, won't you, till you're out of the grounds? It isn't foolish, do you think?

'I promise you I'll go like this,' I said, and let the car start herself down the flagged path.

We skirted the left wing of the house, whose elaborately cast lead guttering alone was worth a day's journey; passed under a great rose-grown gate in the red wall, and so round to the high front of the house which in beauty and stateliness as much excelled the back as that all others I had seen.

'Is it so very beautiful?' she said wistfully when she heard my raptures. 'And you like the lead-figures too? There's the

old azalea garden behind. They say that this place must have been made for children. Will you help me out, please? I should like to come with you as far as the cross-roads, but I mustn't leave them. Is that you, Madden? I want you to show this gentleman the way to the cross-roads. He had lost his way but—he has seen them.'

A butler appeared noiselessly at the miracle of old oak that must be called the front door, and slipped aside to put on his hat. She stood looking at me with open blue eyes in which no sight lay, and I saw for the first time that she was beautiful.

'Remember,' she said quietly, 'if you are fond of them you will come again,' and disappeared within the house.

The butler in the car said nothing till we were nearly at the lodge gates, where



catching a glimpse of a blue blouse in a shrubbery I swerved amply lest the devil that leads little boys to play should drag me into child-murder.

'Excuse me,' he asked of a sudden, 'but why did you do that, Sir?'

'The child yonder.'

'Our young gentleman in blue?'

'Of course.'

'He runs about a good deal. Did you see him by the fountain, Sir?'

'Oh, yes, several times. Do we turn here?'

'Yes, Sir. And did you happen to see them upstairs too?'

'At the upper window? Yes.'

'Was that before the mistress come out to speak to you, Sir?'

'A little before that. Why d'you want to know?'

He paused a little. 'Only to make sure that—that they had seen the car, Sir, because with children running about, though I'm sure you're driving particularly careful, there might be an accident. That was all, Sir. Here are the crossroads. You can't miss your way from now on. Thank you, Sir, but that isn't *our* custom not with—'

'I beg your pardon,' I said, and thrust away the British silver.

'Oh, it's quite right with the rest of 'em as a rule. Good-bye, Sir.'

He retired into the armour-plated conning tower of his caste and walked away. Evidently a butler solicitous for the honour of his house, and interested, probably through a maid, in the nursery.

Once beyond the signposts at the crossroads I looked back, but the crumpled hills interlaced so jealously that I could



not see where the house had lain. When I asked its name at a cottage along the road, the fat woman who sold sweetmeats there gave me to understand that people with motor cars had small right to live—much less to ‘go about talking like carriage folk.’ They were not a pleasant-mannered community.

When I retraced my route on the map that evening I was little wiser. Hawkin’s Old Farm appeared to be the Survey title of the place, and the old County Gazetteer, generally so ample, did not allude to it. The big house of those parts was Hodnington Hall, Georgian with early Victorian embellishments, as an atrocious steel engraving attested. I carried my difficulty to a neighbour—a deep-rooted tree of that soil—and he gave me a name of a family which conveyed no meaning.

A month or so later—I went again, or it may have been that my car took the road of her own volition. She over-ran the fruitless Downs, threaded every turn of the maze of lanes below the hills, drew 5 through the high-walled woods, impenetrable in their full leaf, came out at the cross-roads where the butler had left me, and a little farther on developed an internal trouble which forced me to turn her in on a grass 10 way-waste that cut into a summer-silent hazel wood. So far as I could make sure by the sun and a six-inch Ordnance map, this should be the road flank of that wood which I had first explored from the heights 15 above. I made a mighty serious business of my repairs and a glittering shop of my repair, kit, spanners, pump, and the like, which I spread out orderly upon a rug. It was a trap to catch all childhood, for



on such a day, I argued, the children would not be far off. When I paused in my work I listened, but the wood was so full of the noises of summer (though the birds had mated) that I could not at first distinguish these from the tread of small cautious feet stealing across the dead leaves. I rang my bell in an alluring manner, but the feet fled, and I repented, for to a child a sudden noise is very real terror. I must have been at work half an hour when I heard in the wood the voice of the blind woman crying: 'Children, oh, children! Where are you?' and the stillness made slow to close on the perfection of that cry. She came towards me, half feeling her way between the tree boles, and though a child it seemed clung to her skirt, it swerved into the leafage like a rabbit as she drew nearer.

'Is that you?' she said, 'from the other side of the county?'

'Yes, it's me from the other side of the county.'

'Then why didn't you come through the upper woods? They were there just now.'

'They were here a few minutes ago. I expect they knew my car had broken down, and came to see the fun.'

'Nothing serious, I hope? How do cars break down?'

'In fifty different ways. Only mine has chosen the fifty first.'

She laughed merrily at the tiny joke, cooed with delicious laughter, and pushed her hat back.

'Let me hear,' she said.

'Wait a moment,' I cried, 'and I'll get you a cushion.'

She set her foot on the rug all covered



with spare parts, and stooped above it eagerly, 'What delightful things!' The hands through which she saw glanced in the chequered sunlight. 'A box here—another box! Why you've arranged them like playing shop!'

'I confess now that I put it out to attract them. I don't need half those things really.'

'How nice of you! I heard your bell in the upper wood. You say they were here before that?'

'I'm sure of it. Why are they so shy? That little fellow in blue who was with you just now ought to have got over his fright. He's been watching me like a Red Indian.'

'It must have been your bell,' she said. 'I heard one of them go past me in trouble when I was coming down. They're shy—so shy even with me.' She turned her

face over her shoulder and cried again: 'Children, oh, children! Look and see!'

'They must have gone off together on their own affairs,' I suggested, for there was a murmur behind us of lowered voices broken by the sudden squeaking giggles of childhood. I returned to my tinkering and she leaned forward, her chin on her hand, listening interestedly.

'How many are they?' I said at last. The work was finished, but I saw no reason to go.

Her forehead puckered a little in thought. 'I don't quite know,' she said simply. 'Sometimes more—sometimes less. They come and stay with me because I love them, you see.'

'That must be very jolly,' I said, replacing a drawer, and as I spoke I heard the inanity of my answer.



'You—you aren't laughing at me,' she cried. 'I—I haven't any of my own. I never married. People laugh at me sometimes about them because—because—'

'Because they're savages,' I returned. 'It's nothing to fret for. That sort laugh at everything that isn't in their own fat lives.'

'I don't know. How should I? I only don't like being laughed at about *them*. It hurts; and when one can't see. . . . I don't want to seem silly,' her chin quivered like a child's as she spoke, 'but we blindies have only one skin, I think. Everything outside hits straight at our souls. It's different with you. You've such good defences in your eyes—looking out—before anyone can really pain you in your soul. People forget that with us.'

I was silent reviewing that inexhaustible

matter—the more than inherited (since it is also carefully taught) brutality of the Christian peoples, beside which the mere heathendom of the West Coast nigger is clean and restrained. It led me a long distance into myself.

'Don't do that!' she said of a sudden, putting her hands before her eyes.

'What?'

She made a gesture with her hand.

'That! It's—it's all purple and black. Don't! That colour hurts.'

'But, how in the world do you know about colours?' I exclaimed, for here was a revelation indeed.

'Colours as colours?' she asked.

'No. *Those* Colours which you saw just now.'

'You know as well as I do,' she laughed, 'else you wouldn't have asked that question.'



They aren't in the world at all. They're in *you*—when you went so angry.'

'D'you mean a dull purplish patch, like port wine mixed with ink?' I said.

'I've never seen ink or port wine, but the colours aren't mixed. They are separate—all separate.'

'Do you mean black streaks and jags across the purple?'

She nodded. 'Yes—if they are like this,' and zig-zagged her finger again, 'but it's more red than purple—that bad colour.'

'And what are the colours at the top of the—whatever you see?'

Slowly she leaned forward and traced on the rug the figure of the Egg itself.

'I see them so,' she said, pointing with a grass stem, 'white, green, yellow, red, purple, and when people are angry or bad, black across the red—as you were just now.'

'Who told you anything about it—in the beginning?' I demanded.

'About the colours? No one. I used to ask what colours were when I was little—in table-covers and curtains and carpets, you see—because some colours hurt me and some made me happy. People told me; and when I got older that was how I saw people.' Again she traced the outline of the Egg which it is given to very few of us to see.

'All by yourself?' I repeated.

'All by myself. There wasn't anyone else. I only found out afterwards that other people did not see the Colours.'

She leaned against the tree-bole plaiting and unplaiting chance-plucked grass stems. The children in the wood had drawn nearer. I could see them with the tail of my eye frolicking like squirrels.



'Now I am sure you will never laugh at me,' she went on after a long silence. 'Nor at *them*.'

'Goodness! No!' I cried, jolted out of my train of thought. 'A man who laughs at a child—unless the child is laughing too—is a heathen!'

'I didn't mean that, of course. You'd never laugh *at* children, but I thought—I used to think—that perhaps you might laugh about *them*. So now I beg your pardon. . . . What are you going to laugh at?'

I had made no sound, but she knew.

'At the notion of your begging my pardon. If you had done your duty as a pillar of the State and a landed proprietress you ought to have summoned me for trespass when I barged through your woods the other day. It was disgraceful of me—inexcusable.'

She looked at me, her head against the tree trunk—long and steadfastly—this woman who could see the naked soul.

'How curious,' she half whispered. 'How very curious.'

'Why, what have I done?'

'You don't understand . . . and yet you understood about the Colours. Don't you understand?'

She spoke with a passion that nothing had justified, and I faced her bewilderedly as she rose. The children had gathered themselves in a roundel behind a bramble bush. One sleek head bent over something smaller, and the set of the little shoulders told me that fingers were on lips. They, too, had some child's tremendous secret. I alone was hopelessly astray there in the broad sunlight.

'No,' I said, and shook my head as



though the dead eyes could note. 'Whatever it is, I don't understand yet. Perhaps I shall later—if you'll let me come again.'

'You will come again,' she answered. 'You will surely come again and walk in the wood.'

'Perhaps the children will know me well enough by that time to let me play with them—as a favour. You know what children are like.'

'It isn't a matter of favour but of right,' she replied, and while I wondered what she meant, a dishevelled woman plunged round the bend of the road, loose-haired, purple, almost lowing with agony as she ran. It was my rude, fat friend of the sweetmeat shop. The blind woman heard and stepped forward. 'What is it, Mrs. Madehurst?' she asked.

The woman flung her apron over her

head and literally grovelled in the dust, crying that her grandchild was sick to death, that the local doctor was away fishing, that Jenny the mother was at her wits' end, and so forth, with repetitions and bellowings.

'Where's the next nearest doctor?' I asked between paroxysms.

'Madden will tell you. Go round to the house and take him with you. I'll attend to this. Be quick!' She half supported the fat woman into the shade. In two minutes I was blowing all the horns of Jericho under the front of the House Beautiful, and Madden, in the pantry, rose to the crisis like a butler and a man.

A quarter of an hour at illegal speeds caught us a doctor five miles away. Within the half-hour we had decanted him, much interested in motors, at the door of the



sweetmeat shop, and drew up the road to await the verdict.

'Useful things cars,' said Madden, all man and no butler. 'If I'd had one when mine took sick she wouldn't have died.'

'How was it? I asked.

'Croup. Mrs. Madden was away. No one knew what to do. I drove eight miles in a tax cart for the doctor. She was choked when we came back. This car 'd ha' saved her. She'd have been close on ten now.'

'I'm sorry,' I said. 'I thought you were rather fond of children from what you told me going to the cross-roads the other day.'

'Have you seen 'em again, Sir—this mornin'?'

'Yes, but they're well broke to cars. I couldn't get any of them within twenty yards of it.'

He looked at me carefully as a scout considers a stranger—not as a menial should lift his eyes to his divinely appointed superior.

'I wonder why,' he said just above the breath that he drew.

We waited on. A light wind from the sea wandered up and down the long lines of the woods, and the wayside grasses, whitened already with summer dust, rose and bowed in sallow waves.

A woman, wiping the suds off her arms, came out of the cottage next the sweetmeat shop.

'I've be'n listenin' in de back-yard,' she said cheerily. 'He says Arthur's unaccountable bad. Did ye hear him shruck just now? Unaccountable bad. I reckon t'will come Jenny's turn to walk in de wood nex' week along, Mr. Madden.'



'Excuse me, Sir, but your lap-robe is slipping,' said Madden deferentially. The woman started, dropped a curtsy, and hurried away.

'What does she mean by "walking in the wood"?' I asked.

'It must be some saying they use hereabouts. I'm from Norfolk myself,' said Madden. 'They're an independent lot in this county. She took you for a chauffeur, Sir.'

I saw the Doctor come out of the cottage followed by a draggle-tailed wench who clung to his arm as though he could make treaty for her with Death. 'Dat sort,' she wailed—'dey're just as much to us dat has 'em as if dey was lawful born. Just as much—just as much! An' God he'd be just as pleased if you saved 'un, Doctor. Don't take it from me. Miss Florence

will tell ye de very same. Don't leave 'im, Doctor!'

'I know, I know,' said the man; 'but he'll be quiet for a while now. We'll get the nurse and the medicine as fast as we can.' He signalled me to come forward with the car, and I strove not to be privy to what followed; but I saw the girl's face, blotched and frozen with grief, and I felt the hand without a ring clutching at my knees when we moved away.

The Doctor was a man of some humour, for I remember he claimed my car under the Oath of Æsculapius, and used it and me without mercy. First we convoyed Mrs. Madehurst and the blind woman to wait by the sick bed till the nurse should come. Next we invaded a neat county town for prescriptions (the Doctor said the trouble was cerebro-spinal meningitis), and



when the County Institute, banked and flanked with scared market cattle, reported itself out of nurses for the moment we literally flung ourselves loose upon the county. We conferred with the owners<sup>5</sup> of great houses—magnates at the ends of overarching avenues whose big-boned womenfolk strode away from their tea-tables to listen to the imperious Doctor. At last a white-haired lady sitting under<sup>10</sup> a cedar of Lebanon and surrounded by a court of magnificent Borzois—all hostile to motors—gave the Doctor, who received them as from a princess, written orders which we bore many miles at top speed,<sup>15</sup> through a park, to a French nunnery, where we took over in exchange a pallid-faced and trembling Sister. She knelt at the bottom of the tonneau telling her beads without pause till, by short cuts of the





Doctor's invention, we had her to the  
sweetmeat shop once more. It was a long  
afternoon crowded with mad episodes that  
rose and dissolved like the dust of our  
wheels ; cross-sections of remote and incom- 5  
prehensible lives through which we raced  
at right angles ; and I went home in the  
dusk, wearied out, to dream of the clashing  
horns of cattle ; round-eyed nuns walking  
in a garden of graves ; pleasant tea-parties 10  
beneath shaded trees ; the carbolic-scented,  
grey-painted corridors of the County Insti-  
tute ; the steps of shy children in the wood,  
and the hands that clung to my knees as  
the motor began to move. 15

\* \* \*

I had intended to return in a day or  
two, but it pleased Fate to hold me from  
that side of the county, on many pretexts,  
till the elder and the wild rose had fruited.



There came at last a brilliant day, swept clear from the south-west, that brought the hills within hand's reach—a day of unstable airs and high filmy clouds. Through no merit of my own I was free, and set the car for the third time on that known road. As I reached the crest of the Downs I felt the soft air change, saw it glaze under the sun; and, looking down at the sea, in that instant beheld the blue of the Channel turn through polished silver and dulled steel to dingy pewter. A laden collier hugging the coast steered outward for deeper water, and, across copper-coloured haze, I saw sails rise one by one on the anchored fishing-fleet. In a deep dene behind me an eddy of sudden wind drummed through sheltered oaks, and spun aloft the first dry sample of autumn leaves. When I reached the beach road the sea-fog

fumed over the brickfields, and the tide was telling all the groins of the gale beyond Ushant. In less than an hour summer England vanished in chill grey. We were again the shut island of the North, all the ships of the world bellowing at our perilous gates; and between their outcries ran the piping of bewildered gulls. My cap dripped moisture, the folds of the rug held it in pools or sluiced it away in runnels, and the salt-rime stuck to my lips.

Inland the smell of autumn loaded the thickened fog among the trees, and the drip became a continuous shower. Yet the late flowers—mallow of the wayside, scabious of the field, and dahlia of the garden—showed gay in the mist, and beyond the sea's breath there was little sign of decay in the leaf. Yet in the villages the house doors were all open, and bare-



headed children sat at ease on the damp doorsteps to shout 'pip-pip' at the stranger.

I made bold to call at the sweetmeat shop, where Mrs. Madehurst met me with a fat woman's hospitable tears. Jenny's child, she said, had died two days after the nun had come. It was, she felt, best out of the way, even though insurance offices, for reasons which she did not pretend to follow, would not willingly insure such stray lives. 'Not but what Jenny didn't tend to Arthur as though he'd come all proper at de end of de first year—like Jenny herself.' Thanks to Miss Florence, the child had been buried with a pomp which, in Mrs. Madehurst's opinion, more than covered the small irregularity of its birth. She described the coffin, within and without, the glass hearse, and the evergreen lining of the grave.

'But how's the mother?' I asked.

'Jenny? Oh, she'll get over it. I've felt dat way with one or two o' my own. She'll get over. She's walkin' in de wood now.'

'In this weather?'

Mrs. Madehurst looked at me with narrowed eyes across the counter.

'I dunno but it opens de 'eart like. Yes, it opens de 'eart. Dat's where losin' and bearin' comes so alike in de long run, we do say.'

Now the wisdom of the old wives is greater than that of all the Fathers, and this last oracle sent me thinking so extendedly as I went up the road, that I nearly ran over a woman and a child at the wooded corner by the lodge gates of the House Beautiful.

'Awful weather!' I cried, as I slowed dead for the turn.



'Not so bad,' she answered placidly out of the fog. 'Mine's used to 'un. You'll find yours indoors, I reckon.'

Indoors, Madden received me with professional courtesy, and kind inquiries for the health of the motor, which he would put under cover.

I waited in a still, nut-brown hall, pleasant with late flowers and warmed with a delicious wood fire—a place of good influence and great peace. (Men and women may sometimes, after great effort, achieve a creditable lie; but the house, which is their temple, cannot say anything save the truth of those who have lived in it.) A child's cart and a doll lay on the black-and-white floor, where a rug had been kicked back. I felt that the children had only just hurried away—to hide themselves, most like—in the many turns of the great

adzed staircase that climbed statelily out of the hall, or to crouch at gaze behind the lions and roses of the carven gallery above. Then I heard her voice above me, singing as the blind sing—from the soul:—

In the pleasant orchard-closes.

And all my early summer came back at the call.

In the pleasant orchard-closes,  
God bless all our gains say we—  
But may God bless all our losses,  
Better suits with our degree.

10

She dropped the marring fifth line, and repeated—

15

Better suits with our degree!

I saw her lean over the gallery, her linked hands white as pearl against the oak.

'Is that you—from the other side of the county?' she called.



'Yes, me—from the other side of the county,' I answered, laughing.

'What a long time before you had to come here again.' She ran down the stairs, one hand lightly touching the broad rail. 'It's two months and four days. Summer's gone!'

'I meant to come before, but Fate prevented.'

'I knew it. Please do something to that fire. They won't let me play with it, but I can feel it's behaving badly. Hit it!'

I looked on either side of the deep fireplace, and found but a half-charred hedge-stake with which I punched a black log into flame.

'It never goes out, day or night,' she said, as though explaining. 'In case any one comes in with cold toes, you see.'

'It's even lovelier inside than it was out,'

I murmured. The red light poured itself along the age-polished dusky panels till the Tudor roses and lions of the gallery took colour and motion. An old eagle-topped convex mirror gathered the picture into its mysterious heart, distorting afresh the distorted shadows, and curving the gallery lines into the curves of a ship. The day was shutting down in half a gale as the fog turned to stringy scud. Through the uncurtained mullions of the broad window I could see valiant horsemen of the lawn rear and recover against the wind that taunted them with legions of dead leaves.

'Yes, it must be beautiful,' she said.

'Would you like to go over it? There's still light enough upstairs.'

I followed her up the unflinching, wagon-wide staircase to the gallery whence opened the thin fluted Elizabethan doors.



‘Feel how they put the latch low down for the sake of the children.’ She swung a light door inward.

‘By the way, where are they?’ I asked. ‘I haven’t even heard them to-day.’

She did not answer at once. Then, ‘I can only hear them,’ she replied softly. ‘This is one of their rooms—everything ready, you see.’

She pointed into a heavily-timbered room.<sup>10</sup> There were little low gate-tables and children’s chairs. A doll’s house, its hooked front half open, faced a great dappled rocking-horse, from whose padded saddle it was but a child’s scramble to the broad<sup>15</sup> window-seat overlooking the lawn. A toy gun lay in a corner beside a gilt wooden cannon.

‘Surely they’ve only just gone,’ I whispered. In the failing light a door creaked





cautiously. I heard the rustle of a frock and the patter of feet—quick feet through a room beyond.

‘I heard that,’ she cried triumphantly. ‘Did you? Children, oh, children! Where <sup>5</sup> are you?’

The voice filled the walls that held it lovingly to the last perfect note, but there came no answering shout such as I had heard in the garden. We hurried on from <sup>10</sup> room to oak-floored room; up a step here, down three steps there; among a maze of passages; always mocked by our quarry. One might as well have tried to work an unstopped warren with a single ferret. <sup>15</sup> There were bolt-holes innumerable—recesses in walls, embrasures of deep slitten windows now darkened, whence they could start up behind us; and abandoned fireplaces, six feet deep in the masonry, as



well as the tangle of communicating doors. Above all, they had the twilight for their helper in our game. I had caught one or two joyous chuckles of evasion, and once or twice had seen the silhouette of a child's frock against some darkening window at the end of a passage; but we returned empty-handed to the gallery, just as a middle-aged woman was setting a lamp in its niche.

'No, I haven't seen her either this evening, Miss Florence,' I heard her say, 'but that Turpin he says he wants to see you about his shed.'

'Oh, Mr. Turpin must want to see me very badly. Tell him to come to the hall, Mrs. Madden.'

I looked down into the hall whose only light was the dulled fire, and deep in the shadow I saw them at last. They must

have slipped down while we were in the passages, and now thought themselves perfectly hidden behind an old gilt leather screen. By child's law, my fruitless chase was as good as an introduction, but since I had taken so much trouble I resolved to force them to come forward later by the simple trick, which children detest, of pretending not to notice them. They lay close, in a little huddle, no more than shadows except when a quick flame betrayed an outline.

'And now we'll have some tea,' she said. 'I believe I ought to have offered it you at first, but one doesn't arrive at manners somehow when one lives alone and is considered—h'm—peculiar.' Then with very pretty scorn, 'Would you like a lamp to see to eat by?'

'The firelight's much pleasanter, I think.'



We descended into that delicious gloom and Madden brought tea.

I took my chair in the direction of the screen ready to surprise or be surprised as the game should go, and at her permission, since a hearth is always sacred, bent forward to play with the fire.

‘Where do you get these beautiful short faggots from?’ I asked idly. ‘Why, they are tallies!’

‘Of course,’ she said. ‘As I can’t read or write I’m driven back on the early English tally for my accounts. Give me one and I’ll tell you what it meant.’

I passed her an unburned hazel-tally, about a foot long, and she ran her thumb down the nicks.

‘This is the milk-record for the home farm for the month of April last year, in gallons,’ said she. ‘I don’t know what I

should have done without tallies. An old forester of mine taught me the system. It’s out of date now for every one else; but my tenants respect it. One of them’s coming now to see me. Oh, it doesn’t matter. He has no business here out of office hours. He’s a greedy, ignorant man—very greedy or—he wouldn’t come here after dark.’

‘Have you much land then?’

‘Only a couple of hundred acres in hand, thank goodness. The other six hundred are nearly all let to folk who knew my folk before me, but this Turpin is quite a new man—and a highway robber.’

‘But are you sure I shan’t be——?’

‘Certainly not. You have the right. He hasn’t any children.’

‘Ah, the children!’ I said, and slid my low chair back till it nearly touched the



screen that hid them. 'I wonder whether they'll come out for me.'

There was a murmur of voices—Madden's and a deeper note—at the low, dark side door, and a ginger-headed, canvas-gaitered giant of the unmistakable tenant-farmer type stumbled or was pushed in.

'Come to the fire, Mr. Turpin,' she said.

'If—if you please, Miss, I'll—I'll be quite as well by the door.' He clung to the latch as he spoke like a frightened child. Of a sudden I realised that he was in the grip of some almost overpowering fear.

'Well?'

'About that new shed for the young stock—that was all. These first autumn storms settin' in . . . but I'll come again, Miss.' His teeth did not chatter much more than the door latch.

'I think not,' she answered levelly.

'The new shed—m'm. What did my agent write you on the 15th?'

'I—fancied p'raps that if I came to see you—ma—man to man like, Miss. But——'

His eyes rolled into every corner of the room wide with horror. He half opened the door through which he had entered, but I noticed it shut again—from without and firmly.

'He wrote what I told him.' she went on. 'You are overstocked already. Dunnett's Farm never carried more than fifty bullocks—even in Mr. Wright's time. And *he* used cake. You've sixty-seven and you don't cake. You've broken the lease in that respect. You're dragging the heart out of the farm.'

'I'm—I'm getting some minerals—superphosphates—next week. I've as good as ordered a truck-load already. I'll go down



to the station to-morrow about 'em. Then I can come and see you man to man like, Miss, in the daylight. . . . That gentleman's not going away, is he?' He almost shrieked.

I had only slid the chair a little farther back, reaching behind me to tap on the leather of the screen, but he jumped like a rat.

'No. Please attend to me, Mr. Turpin.'<sup>10</sup> She turned in her chair and faced him with his back to the door. It was an old and sordid little piece of scheming that she forced from him—his plea for the new cow-shed at his landlady's expense, that<sup>15</sup> he might with the covered manure pay his next year's rent out of the valuation after, as she made clear, he had bled the enriched pastures to the bone. I could not but admire the intensity of his greed, when I

saw him out-facing for its sake whatever terror it was that ran wet on his forehead.

I ceased to tap the leather—was, indeed, calculating the cost of the shed—when I felt my relaxed hand taken and turned<sup>5</sup> softly between the soft hands of a child. So at last I had triumphed. In a moment I would turn and acquaint myself with those quick-footed wanderers. . . .

The little brushing kiss fell in the centre<sup>10</sup> of my palm—as a gift on which the fingers were, once, expected to close: as the all-faithful half-reproachful signal of a waiting child not used to neglect even when grown-ups were busiest—a fragment of the mute<sup>15</sup> code devised very long ago.

Then I knew. And it was as though I had known from the first day when I looked across the lawn at the high window.

I heard the door shut. The woman



turned to me in silence, and I felt that she knew.

What time passed after this I cannot say. I was roused by the fall of a log, and mechanically rose to put it back. Then I returned to my place in the chair very close to the screen.

'Now you understand,' she whispered, across the packed shadows.

'Yes, I understand—now. Thank you.'

'I—I only hear them.' She bowed her head in her hands. 'I have no right, you know—no other right. I have neither borne nor lost—neither borne nor lost!'

'Be very glad then,' said I, for my soul was torn open within me.

'Forgive me!'

She was still, and I went back to my sorrow and my joy.

'It was because I loved them so,' she

said at last, brokenly. '*That* was why it was, even from the first—even before I knew that they—they were all I should ever have. And I loved them so!'

She stretched out her arms to the shadows and the shadows within the shadow.

'They came because I loved them—because I needed them. I—I must have made them come. Was that wrong, think you?'

'No—no.'

'I—I grant you that the toys and—and all that sort of thing were nonsense, but—but I used to so hate empty rooms myself when I was little.' She pointed to the gallery. 'And the passages all empty. . . . And how could I ever bear the garden door shut? Suppose—'

'Don't! For pity's sake, don't!' I cried. The twilight had brought a cold rain with



gusty squalls that plucked at the leaded windows.

‘And the same thing with keeping the fire in all night. I don’t think it so foolish—do you?’

I looked at the broad brick hearth, saw, through tears I believe, that there was no unpassable iron on or near it, and bowed my head.

‘I did all that and lots of other things—just to make believe. Then they came. I heard them, but I didn’t know that they were not mine by right till Mrs. Madden told me—’

‘The butler’s wife? What?’

‘One of them—I heard—she saw. And knew. Hers! *Not* for me. I didn’t know at first. Perhaps I was jealous. Afterwards, I began to understand that it was only because I loved them, not because—’

... Oh, you *must* bear or lose,’ she said piteously. ‘There is no other way—and yet they love me. They must! Don’t they?’

There was no sound in the room except the lapping voices of the fire, but we two listened intently, and she at least took comfort from what she heard. She recovered herself and half rose. I sat still in my chair by the screen.

‘Don’t think me a wretch to whine about myself like this, but—but I’m all in the dark, you know, and *you* can see.’

In truth I could see, and my vision confirmed me in my resolve, though that was like the very parting of spirit and flesh. Yet a little longer I would stay since it was the last time.

‘You think it is wrong, then?’ she cried sharply, though I had said nothing.



‘Not for you. A thousand times no. For you it is right. . . . I am grateful to you beyond words. For me it would be wrong. For me only. . . .’

‘Why?’ she said, but passed her hand before her face as she had done at our second meeting in the wood. ‘Oh, I see,’ she went on simply as a child. ‘For you it would be wrong.’ Then with a little indrawn laugh, ‘and, d’you remember, I called you lucky—once—at first. You who must never come here again!’

She left me to sit a little longer by the screen, and I heard the sound of her feet die out along the gallery above.

## 解 題

Kipling が短篇小説の作家としての技倆は往々佛のモオバツサンにも比せらるゝのであるが、この篇などを見ては、また實にその行くところとして可ならざるなき普遍の才に驚かざるを得ないのである。Kipling が普通の作にのみ見馴れた眼では、この篇を以て全く別手に出でたものと思ふかも知れないが、Kipling がこの種の境地に手を觸れたのは、獨りこの篇に於てのみではなく、一八九三年の *Many Inventions* 集中に收めた *Finest Story in the World* や、一八九八年の *The Day's Work* 集中に收めた *The Brushwood Boy* などは、この篇と共に、作者が空想の世界に於て、人間の現實を離れ、一步幽冥界に足を踏み入れやうといふ際どい境に於ても、優にその得意の地にあるを示してゐるのである。

‘They’ の一篇は、始め米の *Scribner's Magazine* で公にされ、一九〇四年の秋 *Traffics and Discoveries* 中に收められたのであるが、幽趣微韻ともいふべき殆ど捕捉し難きその靈筆は、當時既に少からず批評家の頭腦を悩ましたものである。或は「兒童果して天に於て幸福なりや」の疑ひを寓したるものと云はれ、或は盲人の「色彩」に對する微妙の哲理を説きたるものと



云はれ、諸家の説區々として我等は殆どその歸趣に迷ふのであるが、我等は詩の如きこの一篇を enjoy するに於て、敢てこれ等批評家の見に煩はさるるに及ばないと思ふ。優れたる藝術の何れの作物に對するとひとしく、我等は唯虚心にしてこれに向ひ、有りのままなるその姿のうちに、おのがじじその微妙の味を汲めばそれでよいのではあるまいか。

「彼等」にはもと一題詩があつたのである。我等はこれを巻頭に復刻することを略したが、全篇を味ふ手引きにと、今ここに解題に際して、やはりこれを抄出することにする——

The Return of the Children

Neither the harps nor the crowns amused, nor the cherubs' dove-winged  
races—  
Holding hands forlornly the Children wandered beneath the Dome;  
Plucking the radiant robes of the passes-by, and with pitiful faces  
Begging what Princes and Powers refused:— 'Ah, please will you let us  
go home?'

Over the jewelled floor, nigh weeping, ran to them Mary the Mother,  
Kneeled and caressed and made promise with kisses, and drew them along  
to the gate-way—  
Yea, the all-iron unbribeable Door which Peter must guard and none  
other.  
Straightway She took the Keys from his keeping, and opened and freed  
them straightway.

Then to Her Son, Who had seen and smiled, She said: 'On the night  
that I bore Thee  
What didst Thou care for a love beyond mine or a heaven that was not  
my arm?'

Didst Thou push from the nipple, O Child, to hear the angels adore  
Thee?  
When we two lay in the breath of the kine?' And He said:— 'Thou  
hast done no harm.'

So through the Void the Children ran homeward merrily hand in hand,  
Looking neither to left nor right where the breathless Heaven stood still;  
And the Guards of the Void resheathed their swords, for they heard the  
Command:  
'Shall I that have suffered the children to come to me hold them against  
their will?'

Kipling がこの詩を巻頭においた眞意は何にあるかよくも分らぬが、また今ここにこの詩の意義を一々解釋するの餘裕も我等はもたないのであるが、要するに、兒のこの世を去りて天に赴くも、その珠玉珍寶、妙へなる音楽、奇しき天人の姿も少しも彼等を喜ばしむるに足らず、慕ふは却て世の常の我が家に歸りて母の膝下にいつくましれんことにあるとの意に外あるまいと思ふ。これは確かに「彼等」のうちにひそめる一つの思想に違ひはあるまい。否、「彼等」を読むものは先づこの一事を深く念頭におくのが要があるのである。これに加へて、全篇を流れてゐるも一つの思想といふのは、何人でも子供を生み、また亡くした人でなければ、眞に子供を解することは出来ないといふことである。けれども、その人の境遇運命に依つて實際人の母には到底なり得ぬといふ人でも、その愛と同情の念力に依つては、てもなく predestined ともいふべき母の資格を得るので、身のほとりに數多可愛ゆき亡靈の兒を呼び



寄せて、いぢらしくも亦慎ましき心遣ひをもて、これを我が胸に抱くを得るものである。第三の思想ともいふべきこの秘密が、此篇の中心骨子となつてゐるのである。批評家の手前觀に捉はれぬやうにと云ひながら、我等は覺えず勝手の談理に落ちて仕舞つたが、さて Kipling が語るところの物語はといふと、ここに一人の美しい未婚の婦人の獨り寂しく林中の古い館に住んでゐる。婦人は生れながらにして目盲ひてゐるが、その爲め視力以外の他の感覺は一層鋭い發達をしてゐる。孤獨のその胸は切りと子供を慕ふて已む時とてない、して、斯くその念力の凝つて時と空間のあらゆる條件を押し去るので、子供が死ぬと、自然この大慈悲の乙女の母のもとへと寄つて來るのである。盲ひたるその眼は可愛ゆきこれ等の幼な兒を見ることは出來ないのであるが、美しとも美しき、エリザ朝式の古き館なる、數多き部屋部屋を通うして、小さなその足音を聽き、可愛ゆきその聲を聽き得るのである。ところへ、桃源郷ともいふべき林中のこの館へ、ふと一人の訪問者がある。その人も亦並ならず子供の好きな人で、而かも嘗て自ら愛し、亡くしたことのある人であるが、影の如くに出没する「彼等」を見て、何とも合點のゆかず、全く五里霧中に迷つて仕舞ふ。が、到頭「彼等」の一人の唇からふと我が手に與へた接吻に依つて、彼は卒然凡てを解するに至る。さて——これは譯者の私見で

あるが——子供を愛するといふ共通の興味から、一方また美しき盲女に對する男の同情から、二人の間には知らぬ間に淡い、而かも哀切な思ひが湧いてゐる。館の女主人のしてゐるやうな、斯かる試みは、自分にとつては道に外れたことになるかと云つて、男は再びここを訪はざるべく、永く別れていつて仕舞ふ。人妻でもなく、未亡人でもなく、而かも母たる、いぢらしき愛慕の情を幼兒に對してもつてゐるその女主人公にこそ、この特殊の恵みの天よりゆるされてゐるといふのが、Kipling のこの物語の荒筋である。

夢のやうな物語ではある。林中のあの「美はしの館」も、目盲ひたる乙女の美しい *chatelaine* も、出沒常なき「彼等」とひとしく、皆悉く幻の影ではあるまいかと思はれるまで、朦朧として捉へ難きものである。この夢の境を驚かす物語の主の *visitor* が自動車をやつていくとは實に意外中の意外である。初夏の美しい南英サセックスの海岸を走る、文明の利器中の利器ともいふべきこの車を驅つて、我等は共に奇しきとも奇しき彼の桃源郷に迷ひ入るのであるが、忽ちにして現はれ忽ちにして隠るるあの幼兒等といひ、執事の *Madden* が素振り應對といひ、我等は車の主とひとしく、最後まで全く合點のゆかぬだらけで、愈深く夢の境に分け入る思ひがする。が、風の如くに疾く、また輕き接吻の、天の默示の如く物語の主の掌上に落つる



や、敏感の讀者は彼と共に、それとなくこの物語の秘奥に觸れ、顧みて前の一々の疑ひを解くであらうと思ふ。悲惨な、また醜惡な菓子店の episode も、汚なしともきたなき借地人の強慾も、皆それぞれ活きたる生の一斷片で、特にこれをこの美しき夢幻境に配したる作者の心持ちも、凡そそれと推しられるのである。その爲め物語の何等害はるるといふことなく、却て一層の眞と美とを加ふる心地がある。帝國主義の宣傳者であり、最近科學の謳歌者である Kipling から、その本領の自動車といふものを中心として、詩の如く美しきこの小話を聞くは、remarkable とも實に remarkable な、一つの奇跡であるやうに思はれてならない。

## NOTES

## Page 1.

2. **its fellow** 同僚、仲間の意にて、結局 another hill top といふに同じ。
2. **the county** もと伯爵領の意なれども、古くより我が上總の國、相摸の國といふ如き行政区劃となりなれり。こゝに *the county* といは作者 Kipling の住居ある、英海峡に面せる南英 Sussex 州を指すなり。
3. **at no more trouble**..... 自動車にて走りなれば斯く云ふ。
4. **let the county flow**..... 郡領を通じて自動車を疾走せしめたるの意。
5. **orchid-studded** 野蘭の花の飾りポタンのやうに美しく點々せるをいふ。
7. **the Downs** 西 Hampshire より東南に向つて走れる丘陵の脈、Eastbourne に近き Beachy Head にて盡く。自動車は今東 Hastings の方より西に向つて走りたるべく、前行の *the East* といふは、ヘスティングスの方なる平地をいふなるべし。

## Page 2.

1. **clean** 全く、すつかりと。
2. **that precise hamlet**..... Washington といふ名前



の村なるべし。北英 Durham に近きところに、この名前の小市あれど、サセックス州にも同様の名の小村あるなるべし。

5. **the only things awake** 前行の bees と apposition となりなれり。

6. **Norman churches** ノルマン式とは Conquest 以前よりノルマン人に依つて英吉利に輸入され、Henry 二世の頃まで行はれし建築様式にて、主として寺院のそれに用ゐられ、圓き弓門を以てその特徴とす。このあたり佛蘭西の對岸だけにこの式の寺多きなるべし。随分と古きものなり。

7. **miraculous** 橋の下にかくれ、草の間に没せるより斯く云ふ。

9. **tithe-barns** 田地の收穫の十分の一を寺に納めるを tithe と稱し、其納付の收穫を入れおくべき納屋を tithe-barn といふ。今は全く現金にて納むる故、實際の用はなきものなるべし。

12. **Knights of the Temple** 中世紀に於てエルサレムの聖都に詣づる巡禮の旅路を保護せる武士をいふ。通例 Knights Templars といふ。

13. **Gipsies** 十五世紀の初葉より西歐羅巴を漂泊遍歴する人種にして、特種の言葉を話し、色黒く黒眼勝ちに、天幕や馬車のうちに住み、賣卜、音楽、博勞、鑄掛師を業とす。

14. **fought it out** 途切れさうになつてあれど、兎も角何うにか生へ續きてあるをいふ。譯文は原意を直譯敷衍せり。

15. **Roman road** 古羅馬人の Britain を征服せし折開きし街道なり。この種の路英の各地に散在す。Hilaire Belloc

著 *Path to Rome* はこれに就きての面白き名所圖繪式讀物にして、特にこのあたりの事に詳し。

20. **ringed head** 山の頂の禿げて、その下にぐるりと鉢巻のやうに青きもの生じ、更にその下の禿げてあること、かの佛、伊の加特力教の僧侶の頭の如きをいふ。こゝに that great Down とは、恐らくかの Eastbourne の西に立つ Beachy Head を指すなるべし。

### Page 3.

1. **the low countries** イ、ストボンより東なる一帶の平地をいふなるべし。

2. **the lie** = manner of lying. 即ち position といふに同じ。

4. **to his feet** の his は前頁の that great Down を指す。

5. **did not allow for** これを差引して考へなかつた。

7. **a green cutting** の cutting は名詞にて、切通しの意。green とは草や苔の生じたるをいふ。brimfull は cutting を形容す。

11. **stuff** 枝の餘りにゴチャゴチャと重なりあひをれば、斯く屑とやうと云ひしなるべし。

16. **spent** 咲きからの。次の primrose-clumps を形容す。

19. **as the slope favoured** 坂が車の進みを助けてゐるので。shut off 制したの意。

### Page 4.

2. **arguing against** あたりの寂寥を破つてゐるなり。



6. **on the second speed** 次の速力、即ち前よりは速力をゆるめる。

13. **levelled** 鐵砲ならば照準を合すをいふにて、こちらを狙つてゐる様を云ふ。

15. **black** 常盤木の深く繁れる木立は黒く見ゆるものなれば斯く云ふ。

18. **lichened** 苔もて蔽はれたる。li/kénd 或は lich/énd と發音す。

19. **mullioned windows** 窓枠の三つ位に分かれたれ、そこが飾りある豎子でしきられてある古風の窓をいふ。

## Page 5.

2. **on the fourth side** 前の three sides に對して、残りの一側をいふ。

9. **that jewel** 小さき鳩小屋の如何にも美しき故斯く云ふ。in that setting 斯くうまく取り合はされてゐる。

11. **packed off** 遠慮會釋なく追ひ立てられる。

12. **wallop** 駈り。

13. **Shakespeare and Queen Elizabeth** この邸の建築の如何にもエリザ朝式の美しさを極めてゐるので斯く云ふ。

## Page 6.

4. **thrown up against** に對照して、くつきりと白く吹き上げてゐた。

12. **stone step** 門の扉のところにゐるなり。

13. **as slowly** 石段に足をかけた時と變りなく、同じのろのろとした足取りで。凡て盲人の氣をつけて歩く態度をいふ。

## Page 7.

3. **turned and made** の made は showed herself 左様いふ態度をしたの意。

6. **No one to speak to** 話しかけて道でも訊ねやうといふ人には一人も逢はぬ。

16. **if I know anything** 實際何にも知らぬが、ちよつとでも知つてゐたとしたら。

19. **I should imagine** 先づ左様思ひますが。should は大分に意を弱むる力あり。

## Page 8.

18. **they tell me** 盲人にて見えれば斯く云ふ。

19. **squeeze along** 芝生の上を無理に行くより斯く云ふ。

## Page 9.

7. **star-sapphire** = asteriated sapphire. 星の後光のやうな光の六筋さしてゐる青玉。

9. **please don't help me.** 女の乗るところを手を貸さうとしたので、それを辭して斯く云ふ。

14. **what's going to happen** どんな珍らしいことが始まるか、ようくまあ御覽なさい。



## Page 10.

3. **disposedly** = properly; in an orderly manner.  
 19. **Oh, unkind!** 折角斯うしてゐるのに、一向に子供の出て來ぬので、その怨みをいふ。

## Page 11.

4. **wrong of me to say that** 前の Oh, unkind! と叱りしに對して云ふ。

## Page 12.

1. **them** 子供達をいふ。just as I.....は夢でも起きてる時と同じにの意。  
 6. **all but hidden** = almost hidden.

## Page 13.

6. **wanted to P** は死んだ人の顔を夢に見るをいふ。即ち to see the face.....の略。  
 11. **So 've I** = So I have wanted.....  
 19. **at first** 何は兎も、これで大丈夫獨り行きが出来るといふ所へ出るまで。

## Page 14.

17. **as that all others** 何の家でも表は後よりも美しいのであるが、此家の表が裏に立ち優つてゐることは、これ

まで自分の見た如何なる家の表にも劣らない、最も立ち優れたものであつた。

## Page 15.

3. **help me out P** 自動車から下りるところである。  
 8. **he has seen them** 斯く仰山に云ふは、自分が盲目で見られぬ爲めのみでなく、別に深き仔細あり。解題参照。  
 11. **miracle of old oak** えたいの知れぬ、不思議な門なので斯く云ふ。

## Page 16.

14. **'appen** = happen. 下等社會の訛りにて、hを落として發音するなり。

## Page 17.

7. **Thank you, Sir.** こちらで心付けの金 (tip) をやらうとしたのを、無理に辭退して斯く云ふ。  
 9. **thrust away the British silver** 折角向ふの手へ渡しかけた銀貨をば、急に無造作にひつこましたのである。  
 13. **armour-plated conning tower** 執事 (butler) といふ輩は、殆ど血の通つて人間とは思はれぬまで、妙に取り濟ましたものである。Madden は今またもとのこの冷靜な態度に歸つて、そんな事を云はずに取つておいてくれといふやうな、打ち解けた談判などとても出來ず、取りつく島もないといふやうな濟ました風をして仕舞つたのである。



18. **Once beyond** 一と度出ぬけて仕舞ふや否。  
 19. **crumpled** 山の起伏を遠くより見ると、まるで皺のやうに見えるのである。  
 20. **jealously** (水も洩らさじとやうに) 互ひに固く重なりあつて。

## Page 18.

4. **gave me to understand** 斯くかくとやうに、自分に納得せしめた。

## Page 19.

3. **of her own volition** 自分の意志で、勝手に。  
 11. **summer-silent** 同じ静かと云つても、秋や冬のやうな静寂ではなくて、折には幽鳥の音の聽えるといつた風で、何となく生氣に満ちたる静かさをいふ。されば **silent** はむしろ **quiet** の意と見て可なるべきか。

## Page 20.

14. **the stillness.....of that cry.** 斯うした静かな森林中でなく、普通のところでは、あたりの空氣が迫つて來て聲を埋もらして仕舞ひ、すぐ聽えなくなつて、とてもその語尾までなど聽くことは出來ないのであるが、森がひっそりと静まり返つてゐるので、長く長くその餘韻までも洩れなく聞き取れるので、愈その盲女の迫つた叫び聲がいぢらしく思へたの意。

18. **it seemed** 挿句なり。

## Page 21.

17. **Let me hear** 盲人なれば 斯く云ふなれど、また別に深き仔細あり。

## Page 22.

1. **spare parts** 萬一の豫備にと用意してある車體のそれぞれの小部分。parts とは車を解體すると、幾つもの小さなものになる、それを云ふなり。  
 3. **hands through which he saw** 盲人なれば、手が眼の代用をするので斯く云ふ。  
 6. **like playing shop** 小供が「まゝごと」の遊びをして、店屋ごっこでもしてゐるやうに。  
 15. **He's been.....** 北米の銅色のあから顔をした土人が見馴れぬ白人の船のついたので見えてゐるやうに。  
 17. **must have been your bell** 子供が怖わがつてゐるのは、貴方のベルの音に違ひない。

## Page 23.

3. **on their own affairs** 向ふは向ふで、何か別の事。  
 10. **at last** 訊かうきかうと思つてゐたのだが、到頭思ひきつて。

## Page 24.

6. **That sort**=that sort of people.



7. **fat lives** 種々なる贅澤三昧をしつくして、更に精神的の趣味なき生活。

## Page 25.

2. **brutality of the Christian peoples** 文明國民の禮式作法にのみかゝづらはつて、徒らに表面のみ美しく、その下に針の如き刺を藏し、世の哀れなる、不遇の人を虐げるをいふ。

3. **beside which** その傍へ列べては。それと比べては。

4. **the West Coast nigger** 阿弗利加西海岸に棲む黒奴中の最も下等なるもの。斯かる邪宗徒ですら、遙かに brutal といふ汚れはない (clean), また、遙かに人間の我を抑へてゐる (restrained)。

## Page 27.

17. **chance-plucked** 何の氣なしに、ふと摘みたる。

## Page 28.

4. **Goodness!** 不意の驚きを示す間投詞。

16. **pillar of the State** 唯の身分の人でなく、立派な大地主といふ婦人なれば斯く云ふ。

## Page 29.

6. **why** 意外の意。

10. **nothing had justified** 何物もその熱情をば尤もと合點せしめぬ。

16. **fingers were on lips** 靜かにせよとの合圖。何やらひそひそと内所で語らつてゐたるなり。子供心にも女主人のこの紳士に對して、何やらいちらしき思ひを運んでゐる氣なるを讀みしなるべし。

## Page 31.

13. **blowing all the horns of Jericho** ジェリコは Palestine の古都にて、イスラエル人の聖地に入りて始めて占めし都。その城壁のくづるゝ以前、僧侶等角笛を吹きて、危しと喧しくこれを警告せり。一大椿事と一生懸命自動車のベルを鳴らせしをいふ。

14. **the House Beautiful** この邸を自分で斯く命名したるなり。

16. **like a butler and a man** 前に云ひし如く、執事は面悪きまで落ちつき濟ましてゐるものなれど、流石この時は血のある人間らしく驚いて早速に出て來たのをいふ。

## Page 32.

9. **tax cart** 百姓の荷馬車のやうでなく、彈機(はね)つきの軽い二輪馬車。前に此種の車に税をかけしより此稱あり。

18. **well broke to cars** よく自動車に馴れてゐる、従つてその危険を知つてゐる故に容易に近寄らぬ。

## Page 33.

10. **whitened already** 夏は路が乾きて塵がたかり、草の葉が白くなる。まだ初夏なれど既に早や……の意。



15. **de back-yard**=the back-yard 獨逸人の英語のやうに、下等社會は th を d と發音するなり。

16. **Arthur** 子供、即ち菓子屋の婆さんの孫の名前。Jenny はこの子の母親、即ち婆さんの娘。

17. **shruck** は shriek の訛り。

19. **walk in de (the) wood** 森の中を歩くといふは、そこをぶらついて村の若い男など、戯れるの意。Madden がその意味を訊かれて答へぬは、この言外の意ある爲めなり。子供が死ねば、すぐまたけるりとして巫山戯まはる下等社會の習ひ。

18. **unaccountable**=unaccountably 形容詞を副詞の如く用ふるは、俗語殊に下等社會の習ひなり。—I reckon=I suppose.

## Page 34.

8. **Norfolk** 英國東北海岸の一州にて、南の Sussex とは全然違つた土地。

15. **Dat sort**=that sort of children.

17. **dey're just as much.....lowfull born** = They are just as dear to us who bore them as they were lawfully born. 現在それを生んだ私達には、たとへば内所の父(てい)なし子でも、立派に正當に生れた子供と同じに可愛くも亦大切である。

19. **just as pleased** 神様も私達と同じやうに。—'un=one.

20. **Miss Florence** 前の美しき邸の女主人の名前。

## Page 35.

2. **'im**=him 例の下等の訛り。

10. **without a ring** 結婚してゐないといふ何よりの證據。

12. **a man of some humour** 生真面目な、遠慮勝ちな男なら、なかなかそんな事はせぬのであるが、ちよつとおどけ氣のある、氣輕な男で、かまはず此方の車を使つた。

14. **Æsculapius** 古代希臘の醫藥の神。

## Page 36.

1. **banked and flanked** 當日恰も市の立つ market day にてもありしなるべし。

6. **at the ends** 田舎の貴族の邸などは、一里もありさうな長い並木路の奥にあるのである。

8. **from their tea-tables** 恰も午後の四時か五時の茶の時に、初夏の事とて木蔭でこれを喫しをりしなるべし。

12. **court** すらりと並びあるさまを云ふ。

19. **tonneau**=cask; tun. 桶といふは乗つてゐる自動車の箱をいふ。

## Page 37.

7. **at right angles** 垂直に、まともに。

20. **elder** は古き用ひ方なれど、in that elder day といふ如く earlier in time の意なるべし。



## Page 38.

4. **Through no merit of my own** 敢て自分から差し繰つたのではなく、自然その日暇になつたといふ意を、面白く云ひまはせしなり。

## Page 39.

20. **all open** まだ左して寒くなきを示す。

## Page 40.

2. '**pip-pip**' 何といふことはなし、人が通るとピッ、ピッと呼びかけて見るなり。

7. **best out of the way** 死んで片づいて仕舞つたのは何より幸。

9. **did not pretend to follow** 敢て分るといふ顔つきはしなかつた。

11. **stray**=being out of the normal order; irregular 正當に生れたものでなきをいふ。—Not but what ..... これを除きて遺憾はなけれど、獨りこれのみは残念。

20. **evergreen lining** 周圍に常盤木の枝を以て花環の如き飾りを施せるなり。

## Page 41.

4. **walkin' in de wood** 森を歩くといふことが一轉して、もう全く男と逢ひ引きをするといふやうな意味になつてゐると見ゆ。

13. **Fathers** 聖フランシスといふやうな羅馬教會の高僧達。

## Page 42.

2. **Mine's used to 'un** = My child is used to it. 'un=one は南英サセツクス地方にて it の意に用ゐらる。

3. **find yours indoors** 旦那の子供衆は暖い家の中におゐでしやうと、何の氣なしに云ひしなり。

6. **he would** よいと云つてもきかず、やつてくれた。

## Page 43.

10. **In the pleasant orchard-closes** ..... 人生を楽しい果物園の圍ひのうちに譬へて、そこで花は悉く實り、實は悉く熟するといふやうに、立派に榮えていくことも、私達の祈ることであるが、また花徒らに散り、實の熟ぜずして空しく落ちるといふことも、私達の願ふことである。斯く身の薄倖を祈り、失意のうちに suffer するといふことも、(これが却て神を見るに至るの階段であるので) 結句私達の境遇 (degree) にふさはしきものなりとの意。譯文徒らに文字に拘泥して、謠ひ物といふ流暢な趣を傳へ難きを遺憾とす。

14. **marring fifth line** 全體の味を害つて仕舞ふ五行目をわざと略して、また四行目を繰返すなり。斯く云ふには、この小曲の大分と廣く知れわたりものなるべけれど、譯者の寡聞その歌を聞き知らざるを憾みとす。或は假作の歌をわざと斯く云ひなせしものならんか。



## Page 44.

13. **the deep fire-place** エリザ朝式の家の爐は、彼の Stratford なる沙翁生家のそれと同じく、戸棚のやうに馬鹿に深くなつてゐるのなり。

## Page 45.

3. **Tudor** 一四八五年 Henry 七世の登位より一六〇三年 Elizabeth 女王の崩御までをテユウダア王朝といふけれど、建築様式にてしかいふは、廣くエリザ朝式といふに同じ。

18. **unfinching** 上にいくに従つて狭くなるといふ如きことなき、如何にも廣々としたる意なるべし。

## Page 46.

11. **gatetables** 脚も臺も折れて疊めるやうになつてゐる卓。脚の門扉の如く swing するより此稱あるなるべし。

## Page 47.

17. **embrasure** 壁を深く切つ立て、奥に小さき明り取りあるをいふ。その明り取りが今は塞いであるのなり。

## Page 48.

4. **evasion** 巧く逃げ終うせたといふ喜びのせゝら笑ひ。

13. **that Turpin** と云つて、更に he といふは、これも下様の物言ひなり。

16. **very badly** 俗語にて非常に切にの意。—hall エリザ朝式などの古き家にては、玄關といふはなく、入口を這入ると、すぐ廣間がありて、その三方に gallery がついてゐるなり。

## Page 49.

5. **good as an introduction** こちらが面白さうに追つかけたりなどすると、自然親しみが出来るので、子供に對しては紹介も同じ効力があるのである。

8. **simple trick** 次の挿句を隔て、of pretending 以下に接す。

15. **doesn't arrive at manners** 何ですか何うも、お茶を獻じるといふやうな交際の作法に馴れるやうにはなれないの意。茶といふても一つの食事のやうになつてゐるなり。

18. **with very pretty scorn** 自分が盲人といふので、前のやうな申譯を云ひながらも、manners には馴れきつてゐるといふ誇りの自ら出でたるなるべし。

## Page 50.

10. **tallies** 木片に切り目を盛りて、數を示してあるなり。英政府にては、ノルマン時代の昔より十八世紀の中頃まで用ゐられ、一八三五年の議院の焼失は、多年蓄積せしこの符木を上院の暖爐にて焼き捨てしより起りしとの事なり。

## Page 51.

11. **in hand** = in actual possession 現に自分の所有といはれるのは。



12. **thank goodness** 思ひの外少きを、我と我から驚く意を示す間投詞。

16. **I shan't be**——は in the way? とでもいふべかりを、先きのすぐ Certainly not と引き取りしなり。

## Page 52.

13. **overpowering fear** 女主人と馬鹿にして蟲のよい談判をしに來りしを、立派な紳士の部屋にあるを見て怖れ氣立ちたるなり。七行の推し込むやうにこの部屋に入れられしも、Turpin の早くも紳士のゐるを氣取(はど)りし爲めなり。

18. **did not chatter**..... 戸の掛金位にしきやがたがたいはぬとは irony にて、齒の根も合はず非常にがたつきしを云ふ。

## Page 53.

4. **man to man like** 男同志相對の談判のやうに、遠慮せず手つ取り早くの意。

14. **cake** 家畜の食料の一種なる cotton-seed oil cake をいふにて、草や枯草の補足にこれをやると、根こそげ地の物を喰つて仕舞はず、大變に地面の爲めになるなり。次行 don't cake はこれを動詞に働かしたるなり。

18. **super-phosphate** 過磷酸鹽。譯文これを略す。

19. **as good as** 實際もう注文したも同じ手配になつてゐる。

## Page 54.

14. **his plea** 前々行の It と apposition になりなれり。

15. **that he might**..... 斯くかくせん爲めに、小屋を作る口實を設く。

16. **covered manure** 小屋の内に貯へておいて風雨に曝らされぬやうにする。

17. **the valuation** その肥料を賣拂ひたる價格。—after は次行の he had bled..... 以下に接す。

18. **as she made clear** これも女主人が責め立てて、曝露さしたのであるが。

19. **could not but admire** 感心せざるを得ぬ。譯文少しく云ひまわしを異にせり。

## Page 55.

1. **whatever terror**..... (それが因となつて) 額へいっぱい冷汗を流してゐるその恐怖が何れ程強きにもめげず、その慾を遂げん爲めには (for its sake) 臆せず大膽に平氣で齒向つてゐる (out-facing) のを見て、つくづく感心した。

10. **brushing** 早くまた軽く。

12. **expected to close** 子供の方から見て斯く云ふ。

15. **not used**..... 親しとも親しき間柄とて何の遠慮もなきをいふ。—the mute code 電信の暗號などのやうな a system of signals を code といふ。mute とは暗黙のうちに意を傳ふるより斯く云ふ。

16. **devised very long ago** 接吻といふやうな暗黙



の signal は電信の暗號などより、ずつと以前から自然に工夫發明されたものと、前の code に對して斯く云ふ。

17. **Then I knew** これがこの話の骨子であるので一段の注意を要す。そこで始めて悟つたといふのは、これ等の子供の眞の生きた子供にてなく、幻影であることを、今兼れて身に覚えある可愛ゆき接吻に依つて氣づきたりとの意なり。左様云へば何うも始めから變であつたと、今更のやうに氣づくのが、次の二行へかけての意なり。解題参照。

20. **heard the door shut** タアピンの出で行きしなり。

## Page 56.

13. **no other right** 唯この幻影の子供の聲を聴くだけで、他に何等の資格もない。

15. **Be very glad then** 生(な)しもせず、亡くしもせぬは、結局幸との意にて斯く云ふ。

16. **torn open within me** 此人にも愛兒のありて、それを亡くせしことあるより、急に自分の魂のひきちぎれるやうな思ひがせしをいふ。前の結局貴女が幸との言葉もこの意より出でたるなり。

17. **Forgive me** 餘りにはしたなき愚痴に流れたので斯く云ふ。

19. **my sorrow and my joy** 自分の悲みであり、また同時に喜びである、亡き愛兒の事を想ひ起せしをいふ。

20. **because I loved them so** 一圖に彼等を愛するといふその念力にて、幽冥界より彼等と呼ばひ起せしをいふ。

## Page 57.

3. **all I should ever have** 盲人にて結婚する望もなく唯幻影に接するをせめてもの樂みとするより外なき意。

19. **Don't!** 餘りにいちらしく、聴くに堪へぬので斯く云ふ。

## Page 58.

7. **no unpassable iron** 子供の來て自由にあたれるやうに斯くしてあるなり。それが全くの幻影を迎へるといふ空想などで、愈いちらしく思ふ。

11. **just to make believe** ほんの唯さうと自分を欺いて、左様いふ氣分を起させる爲めに。

16. **And knew** そこで始めて自分は悟つた、その子供はマツデンの女房のであつて、自分のではないことを。

20. **only because.....not because** 唯自分の愛の念力で來るので、我が生みの子といふ爲めに來るのでないことを。

## Page 59.

14. **my vision confirmed** 現に亡き我が愛兒のありありと見えただので、愈此處を辭する決心をした。

19. **it is wrong, then?** 例の盲人の敏感で、こちらの間もなく此邸を立ち去らうと云ふ思ひを氣取(けど)つて斯く云ふ。

## Page 60.

3. **For me** 全く生みの子供を持つてぬのでもない自分に取



つては、斯く幽冥界より幻影を呼び起すは悪しの意なるべし。

12. **must never come here again!** 幻影を見るが悪いといふので、もうこの邸は来てならぬといふ意と、一方それとなくこの人に對して湧き來りし戀ともいふべき念ひの爲めに、斯く悲しく強き言葉を云ひしなるべし。この強き言葉の前行の lucky と妙に對照をなしてゐるので、indrawn laugh といふいちらしき笑ひと共に、讀む者の殊に注意を要することである。

---



大正五年十一月一日印刷  
（正價金五拾錢）

同 年十一月三日發行

著作 者 平 田 一

發行兼印刷者 小酒井五一郎

印刷所 東京市京橋區築地二丁目十七番地  
東京築地活版製造所

發行所 東京市麴町區富士見町六丁目十番地  
研究社

振替口座東京二八六〇一番







終